三重県埋蔵文化財調査報告　52－2

桑名郡多度町

天王平遺跡発掘調査報告II

―― 第二次調査 遺構編 ――

1983

三重県教育委員会

序

多度町は、三重県の最北部に位置する閑静な農村であるが古くより拓けた地であります。多度神社の御神宝をはじめとし、倭姫命の野代宮、日本武尊の尾津前の故事を伝える古跡もよく知られています。また、我が国で始めて木簡を出土した柚井泥炭層遺跡、白鳳期の鴟尾や古瓦を出土し北勢地方に唯一のこされた古代寺院である南小山廃寺など県下でも有数の遺跡がのこされている地域であります。

今回報告する天王平遺跡は、県下でも大規模な遺跡の一つであり、昭和56年度の多度四日市線道路改良に伴う発掘調査に引き続き実施したものであります。調査の結果奈良・平安時代の集落の一部であったことが判明し、遺構の中には公的な施設の存在も想定されるなど多大な成果をおさめることができ、古代のこの地域の歴史を解く重要な遺跡であることがわかりました。

多度町は、近年近郊農村として観光農園などのレジャー基地として、また尖端産業の誘致などめざましい発展を見せており、今後開発の進む地域でありますが、先祖の残した貴重な文化遺産を守り育てていくことも大切なことだと存じます。

ここに、終始ご協力をたまわった関係機関各位をはじめ、調査に従事された地元の方々に謝意を表するとともに、今度とも文化財保護に対する県民各位の御理解と御協力をお願いする次第であります。

昭和５８年３月３１日

三重県教育委員会

教育長　佐々木昇

例　　言

1．本書は、桑名都市計画道路多度香取線道路改良工事に伴う桑名郡多度町天王平・西天王平・小山・尾津平に所在する天王平遺跡の発掘調査の結果のうち遺構をまとめたものである。

2．調査は、事業者である県土本部から執行委任を受け次の体制で行なった。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県教育委員会文化課
　　主事　早川裕巳
　　同　　駒田利治
　　伊勢野久好

3．遺構の実測は、航空写真測量を採用し国際航業株式会社に委託した。

4．本遺跡の遺跡標示略記号を６ＥＴＢとし、図面上の方位はすべて磁北を用いた。

5．本文及び遺構平面図の遺構表示は下記による。

ＳＢ：竪穴住居、掘立柱建物
ＳＤ：溝　　ＳＫ：土拡
ＳＦ：焼土、カマド　ＳＸ：その他

6．本書の執筆は、文化課主事中村信裕の協力を得Ⅰ・Ⅱ・Ⅵを駒田、Ⅲを伊勢野が担当した。

7.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　位置と歴史的環境……2

Ⅲ　遺　　構……4

1．竪穴住居……4

2．掘立柱建物……14

Ⅳ　小　　結……16

図　　版

ＰＬ１　遺跡遠景　第一次調査近景
ＰＬ２　航空写真　Ｃ地区西部　Ｃ地区東部
ＰＬ３　航空写真　Ｄ地区西部　Ｄ地区東部
ＰＬ４　第二次調査近景　Ｃ地区中央部
ＰＬ５　Ｄ地区東部　Ｄ地区拡張区
ＰＬ６　ＳＢ84・86・86　ＳＢ79・80
ＰＬ７　ＳＢ74・75・76　ＳＢ77
ＰＬ８　ＳＢ69　ＳＢ64
ＰＬ９　ＳＢ66・67　ＳＢ65
ＰＬ10　Ｄ地区西部　ＳＢ98
ＰＬ11　ＳＢ95　ＳＢ92
ＰＬ12　ＳＢ93　ＳＢ98
ＰＬ13　ＳＢ102・103　ＳＢ104
ＰＬ14　ＳＢ71　ＳＢ106
ＰＬ15　ＳＢ94　ＳＢ94カマド近景
ＰＬ16　ＳＢ70　ＳＢ87
ＰＬ17　ＳＢ100　ＳＢ106・107

挿　　図

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡地形図
第３図　第二次調査遺構配置図
第４図　ＳＢ61 ＳＤ62実測図
第５図　ＳＢ 3～67・69 ＳＤ68実測図
第６図　ＳＢ70～72・74～77 ＳＤ実測図
第７図　ＳＢ76・80・84～88 ＳＫ78・81～83実測図
第８図　ＳＢ90～95実測図
第９図　ＳＢ96～98実測図
第10図　ＳＢ94カマド実測図
第11図　ＳＢ100 ＳＢ107・108断面図
第12図　ＳＢ100～108実測図

表

第１表　竪穴住居一覧表
第２表　掘立柱建物一覧表

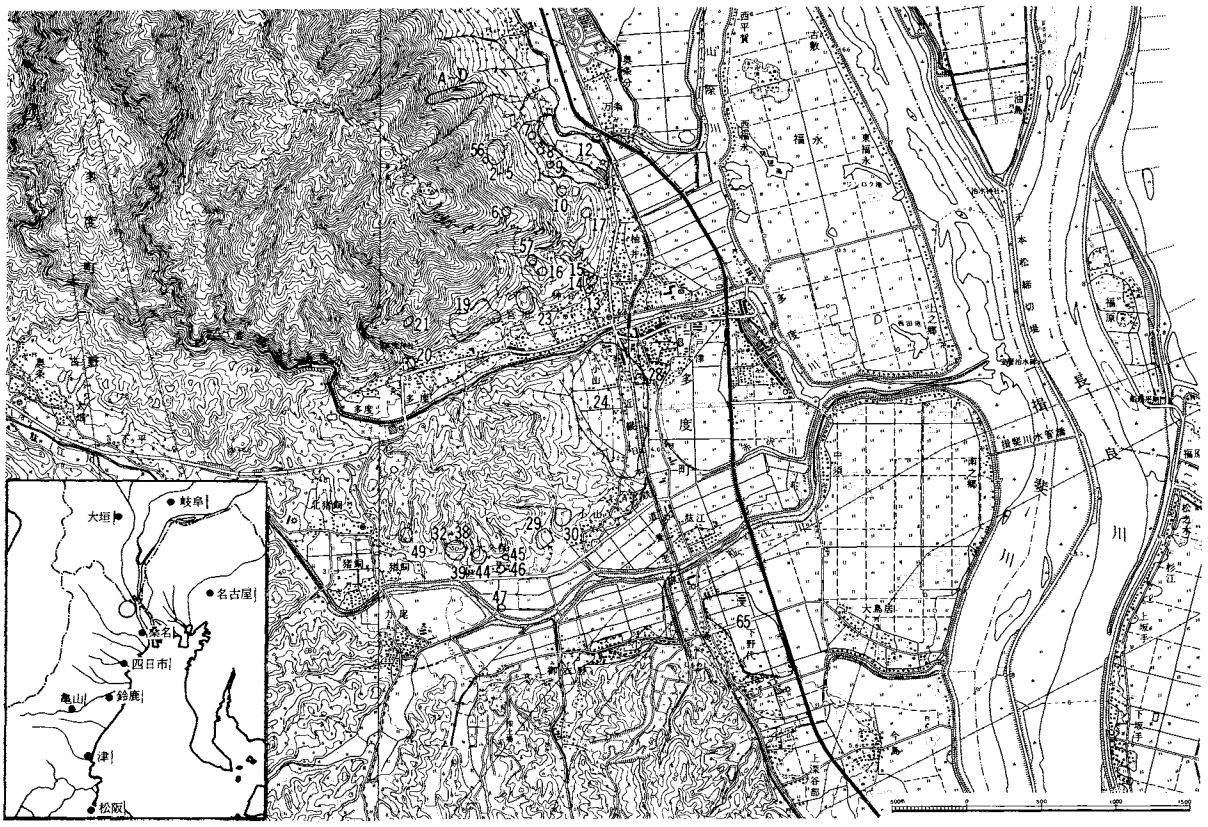
Ⅰ．前　　言

天王平遺跡は、昭和７年に多度小学校建設の際に奈良時代の土馬が発見されるなどして、注目を浴びてきた遺跡である。伊東春夫氏（元桑名高等学校教諭）等の調査により、遺跡は東西 300ｍ・南北 800ｍの範囲に拡がり、表採遺物から奈良時代を中心とする集落跡と考えられるにいたった。

近年、多度川左岸の主要地方道四日市多度線は幅員が狭く、交通量の増加によりしばしば渋滞をおこしているため、南の丘陵地にバイパスを建設し、大桑国道へ接続する計画が進められた。このバイパス建設により、天王平遺跡のほぼ中央部が約 500ｍに亘って破壊されることになり、昭和55年９月より文化課と県土木部・桑名土木事務所で協議が重ねられた。協議の結果、都市計画道路部分の大桑国道近くは既に工事が完成していることや建設予定地の用地買収が部分的に終了していることにより計画変更が不可能であるため、やむなく発掘調査をして記録保存することで合意した。道路建設は、多度小学校より小山に抜ける町道より西側を主要地方道四日市多度線とし、町道より東側の大桑国道までの区間を桑名都市計画道路多度香取線として実施されることになった。

発掘調査は、調査面積及び用地買収の進渉状態を勘案して、昭和56年度に二時期にわけて実施することになった。一般地方道部分を第一次調査とし、６月から９月にかけて約2900㎡の調査を行なった。（「天王平遺跡発掘調査報告」Ⅰ　1982　三重県教育委員会）

都市計画道路部分は、第二次調査として同年12月15日から翌年３月27日まで行ない、約2700㎡の調査を行なった。調査が年度末にあたることもあり、遺物整理・報告書作成は昭和57年度事業として実施することにした。調査の終了した３月28日には、現地説明会を開催し、約70名の参加を得ることができた。



第１図　遺跡位置図（１：50000）国土地理院１/2.5万阿下喜、弥富

II．位置と歴史的環境

桑名郡多度町は、三重県の最北端に位置し木曽・長良・揖斐の木曽三川を界して愛知・岐阜の両県と接する。この地域は、濃美平野の南西端にあたり、木曽三川の沖積作用によって形成された沖積平野と養老山地の東端にあたる標高403ｍの多度山及び丘陵からなる。多度山の南には、開折谷の発達した標高 100ｍ前後の低丘陵と揖斐川の支流多度川・肱江川が形成する谷底平野が拡がっている。沖積平野は、「中須」・「戸津」・「尾津平」の地名に示されるように、かって海岸であったと考えられる。

天王平遺跡は、多度川・肱江川に挾まれた丘陵の東斜面に立地し、東の自然崖の下には沖積地が拡がる。この東斜面は、標高14～50ｍで緩かな傾斜をもつ地形をなしており、集落立地の好条件に恵まれている。遺跡はこの斜面上に拡がり、東西約300ｍ、南北約 800ｍの範囲に及ぶ。行政的には、多度町字小山・天王平・尾津平・西天王平の各地内にあたる。近年、住宅建築が除々に増加してきたが、大半はミカン畑・柿畑・野菜畑として利用されている。

遺跡周辺には多くの遺跡が分布しており、それらは多度山東麓・多度川左岸の多度山南麓・肱江川左岸の丘陵先端部に集中している。

時期的には、古墳時代以降のものが多いが、一ノ谷Ｂ遺跡（54）・柚井泥炭層遺跡（12）・西城遺跡（58）で縄文土器が採集されている。殊に前者では早期の土器とともにポイントが採集されている。次の弥生時代では、一ノ谷Ａ遺跡群（１）で土器片が採集されたのにとどまり、縄文・弥生時代のこの地域の様子については、まだまだ不明な点が多い。

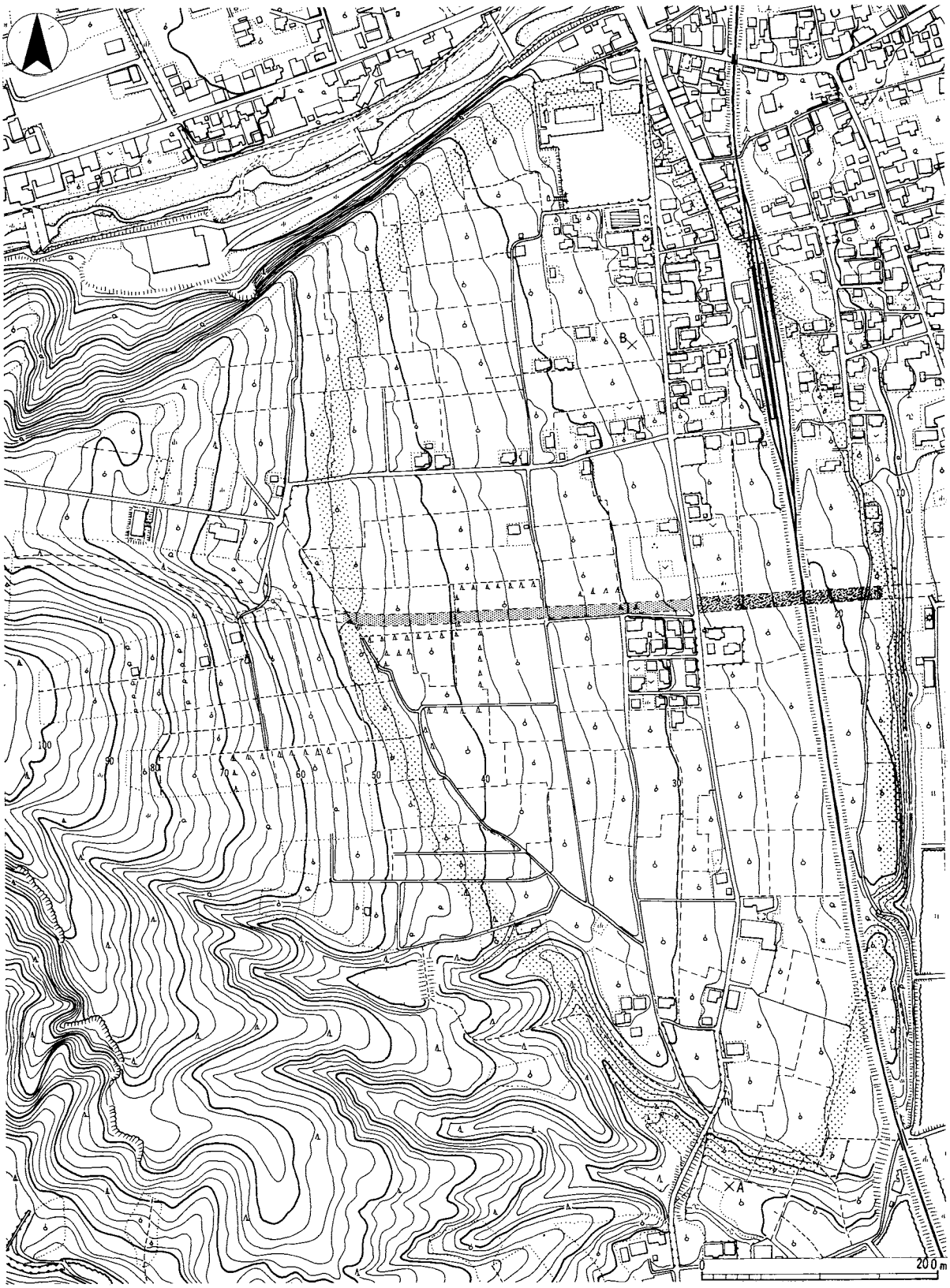
当地域で数多くの遺跡がのこされるようになるのは古墳時代以降のことであり、多度山東麓の一ノ谷古墳群（２～10・56　全10基）・宇賀神社古墳(13～15　全３基)、肱江川左岸の大久保古墳群（32～47　全16基）が知られる。一ノ谷古墳群・大久保古墳群は、ともに横穴式石室を内部主体とする古墳と考えられ、大久保古墳出土の遺物が６世紀後半のものであることから、当地域での古墳の築造は後期の群集墳盛行期のものと考えられる。

奈良・平安時代になると、律令国家体制は整備され、各地の在地勢力も中央国家の組織に組みこまれると同時に中央の文化は地方に波及していった。多度町内には、奈良時代の寺院跡と推定される遺跡が小山地内の南北に二ヶ所ある。北小山廃寺（28）は、近年宅地化が進み瓦片が散見される程度で詳細は不明である。一方、南小山廃寺（29）は、昭和９年の開墾の際に礎石や古瓦が出土しており、鴟尾も採集されている。現在は、畑や山林となっているが平坦地も認められ、北勢地方に唯一のこされた奈良時代の寺院跡として貴重なものである。この二つの廃寺は、各々多度川・肱江川流域に築かれた古墳群の勢力の結集の結果と考えられ、このことは多度川流域に鎮座する式内社宇賀神社と肱江川流域に鎮座する式内社小山神社との関係にも認められる。

また、この寺院と神社の結びつきは奈良時代に発達した神仏習合思想の影響でもあり、その代表的なものが多度神社における天平宝字７年（763）の多度神宮寺の創建である。この神宮寺の伽藍については、史書にも載せられているが、その所在地については多度山南麓にあったと言われるだけで確定されるに至っていない。

また、古代の後半期には荘園が発達し、この地域でも幡桙島東庄・香取庄・野代庄・富津厨・多度厨の荘園が知られている。平安時代末期には、荘園体制もゆるみ新しい階級が成長してくる。伊勢平氏もこうした勢力の一つであり、戸津（富津）は北伊勢における拠点であった。

中世後期には、多度城跡（23）・小山城跡（30）・猪飼城跡（49）などの域館が丘陵端部などの地形を利用して築かれている。



遺跡の範囲　　第一次調査区　　第二次調査区

A；水谷清太氏畑　　B；伊藤淳次郎氏駐車場

第２図　遺跡地形図（1：5000）

Ⅲ．遺　　構

昭和56年度に主要地方道多度四日市線道路改良工事に伴い発掘調査（天王平遺跡、第一次調査）を実施した西側の調査地(Ａ・Ｂ地区)同様、今回の調査においても遺構検出に至った層序としては、表土（約20cm)、地山（赤褐色粘質土、部分的に礫を混入）という二層に区分できる単純層である。いわゆる遺物包含層は、近鉄養老線の東側にあたるＤ地区のほぼ中央付近で中世（山茶椀、陶器等）遺物を包含する層が部分的に認められた。地山は、東に低い傾斜面となっており、東半分が消滅する遺構も多数ある。今回の発掘調査において検出した遺構は、大別して奈良時代の竪穴住居34棟、平安時代と考えられる掘立柱建物７棟、溝２条等である。竪穴住居は周溝が巡り、住居の一辺（南側を除く）にカマドを付設しているものが多い反面、主柱穴は不明となるものがほとんどである。掘立柱建物では、方形掘形で同一方位に位置する一定の規格性が窺える建物で円形掘形の総柱、側柱等、また方位の画一性のない建物の二群に分けられる。

以下、各々の遺構について、概述していきたい。

１．竪穴住居

ＳＢ61

東西に走るＳＤ62により、住居北側の一部が切られる。短辺4.0ｍ、長辺5.0ｍの長方形プランを呈し、南、西の２辺に明確な周溝が巡る。出土遺物としては、土師器甕等少量である。

ＳＢ64

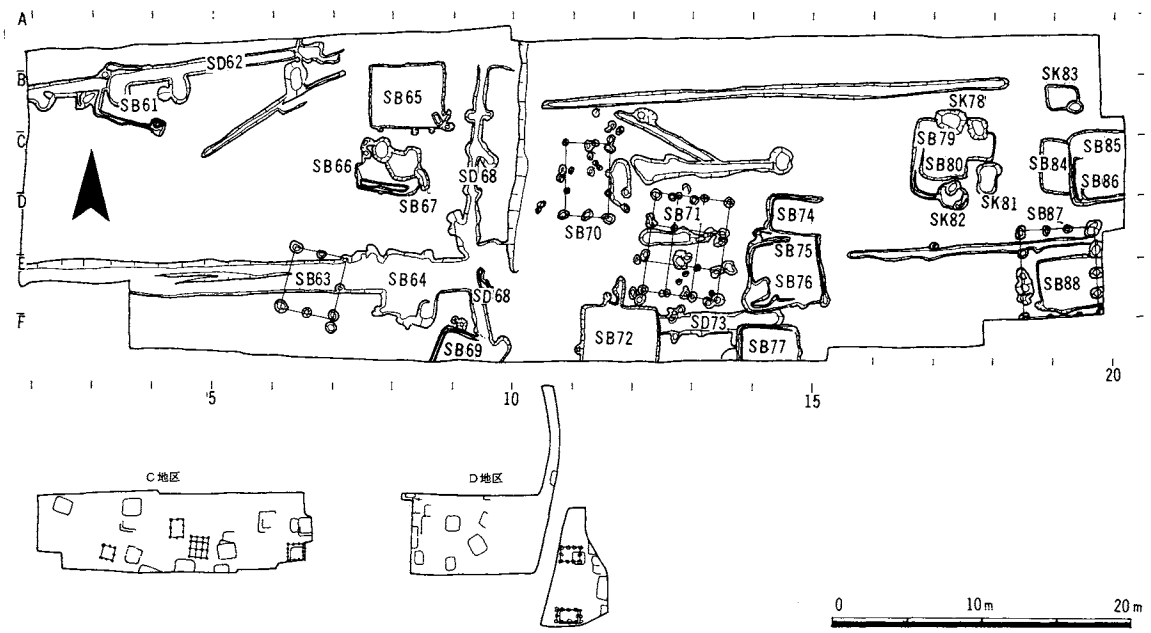
住居規模は、短辺3.8ｍ、長辺4.3mを測る。住居中央部を、東西方向に走る後世の溝により切られる。北辺の東寄りにカマドが付設されているが、この一部も後世の溝により壊されている。周溝は北、西の２辺で確認できた。出土遺物は、床面直上で土師器皿、須恵器蓋等がある。

ＳＢ65

短辺4.2ｍ、長辺5.0ｍの住居であり、周溝・カマドは認められなかった。

ＳＢ66

住居掘形が浅く、短辺2.7ｍ、長辺4.0ｍと長方形プランを呈している。周溝は南辺で確認できた。出



第３図　第二次調査 遺構配置図（1：500）

土遺物は、床面直上で須恵器杯がある。

ＳＢ67

ＳＢ66の南、外辺で周溝のみ検出した住居である。ＳＢ66の拡張によるものと考えられる。

ＳＢ69

住居規模は、東西方向4.7ｍ、南北方向は調査区外に続くため不明となる。住居東側の一部をＳＤ68に切られる。北西部で周溝確認。出土遺物は床面直上で須恵器杯・蓋・甕がある。

ＳＢ72

東西方向4.8ｍ。南北方向は、調査区外に住居が延びるため、規模は不明である。西辺に部分的な周溝が認められた。また北辺中央やや東寄りに焼土範囲（カマド）、その東側に長径80cm、短径60cm、深さ18cmの楕円形を呈する貯蔵穴が設けられている。住居床面直上で須恵器蓋が出土した他、須恵器杯、土師器の杯・甕等が出土した。

ＳＢ74

プラン南半部はＳＢ75・76と重複し、東側は斜面下位のため消滅、周溝は北、西に鍵状に残存している。住居内部で検出した一辺1.1ｍの方形土坑は、床面精査で確認したがＳＢ74との前後関係は不明である。また重複関係にあるＳＢ75との新旧関係についても不明である。

ＳＢ75

ＳＢ74・76と重複関係にありＳＢ76に先行するがＳＢ74との前後関係は不明である。一隅のみで全容は不明であるが、周溝をもつであろう。

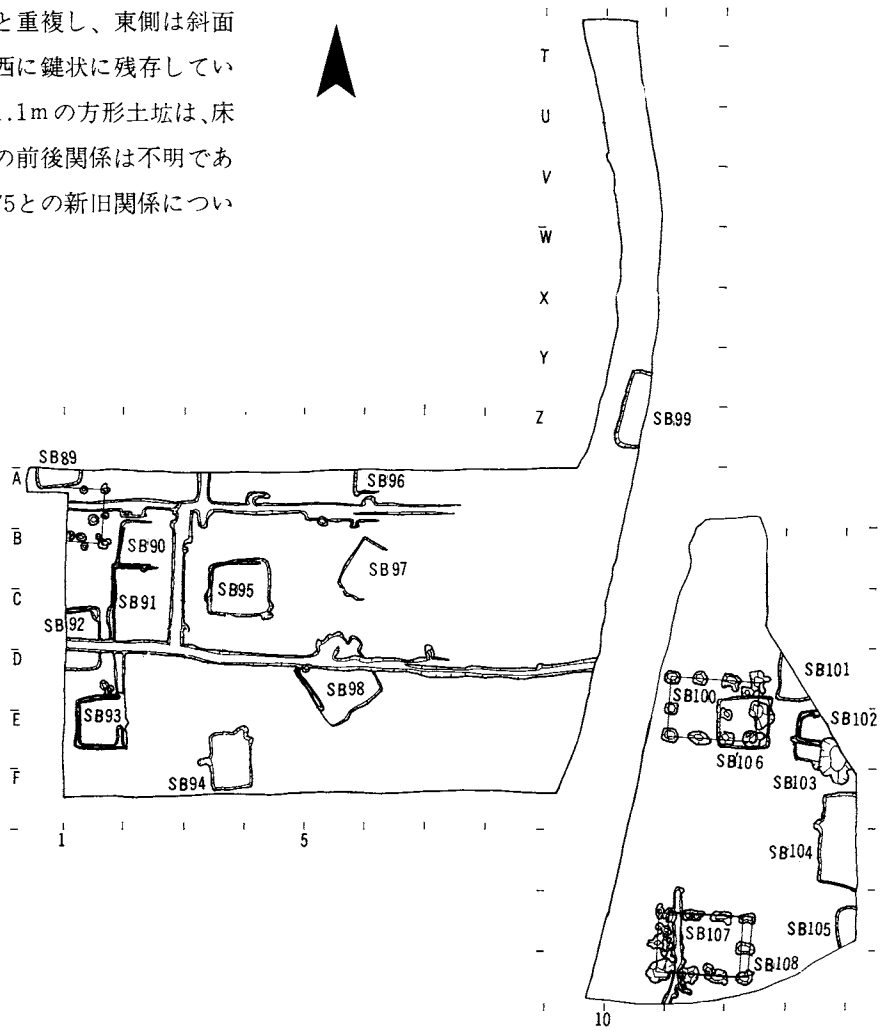
ＳＢ76

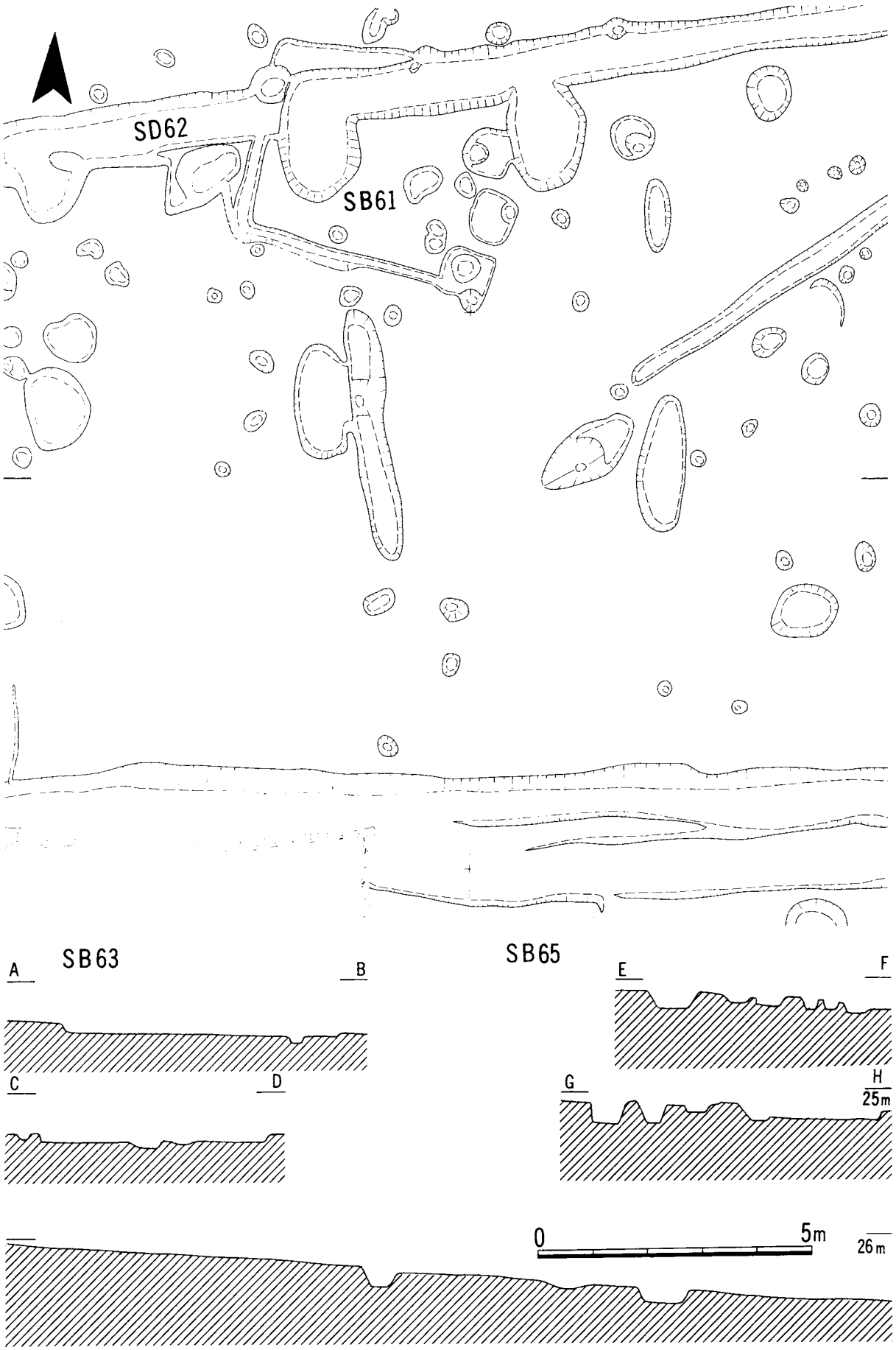
ＳＢ74・75と重複関係にあり、両者よりも新しい。住居の南西隅を後世の土坑に攪乱されるが、遺存の良い住居である。東西5.0ｍ、南北4.7ｍのほぼ方形で、四周に幅20cm前後の周溝がめぐる。南西部を除く三隅で径約50cm・深さ約15cmの主柱穴をもつ。東辺中央部にカマドの残存部と思われる焼土を確認した。

カマド内から土師器甕、床面から鉄製品が出土。

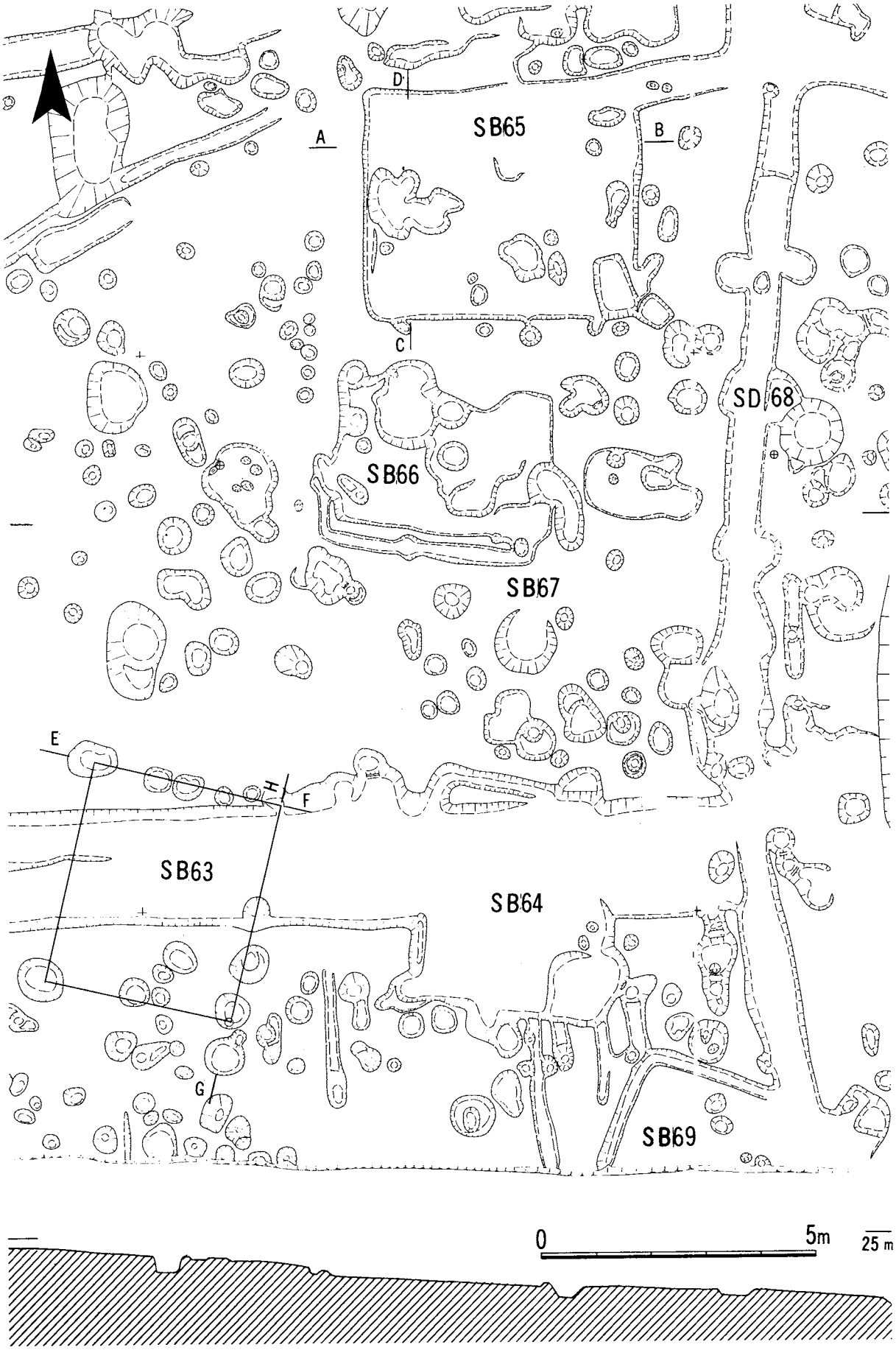
ＳＢ77

ＳＤ73と重複するが、ＳＢ77が新しい。調査区南壁にかかり、北半分のみの検出である。東西 4.0ｍ

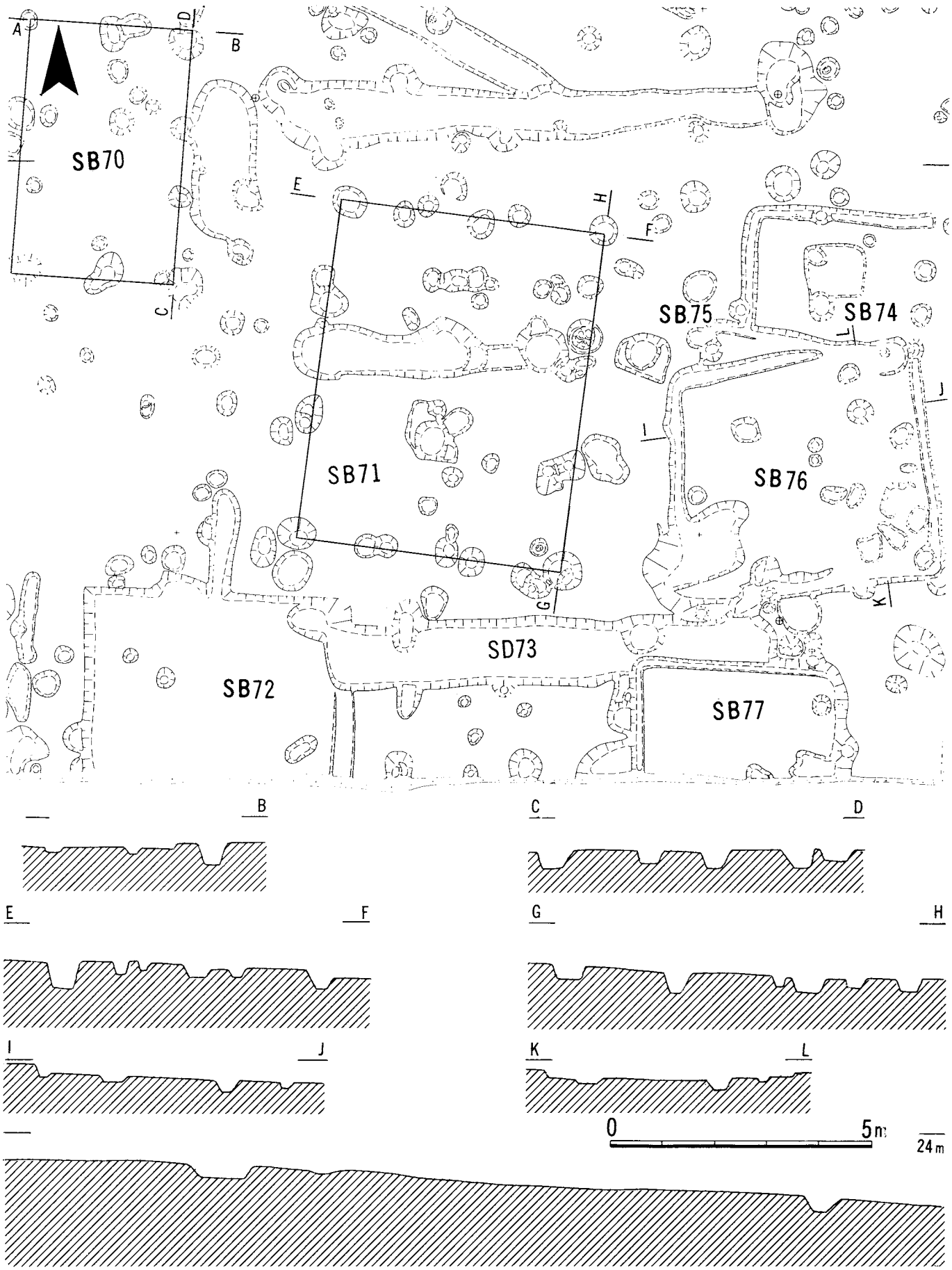




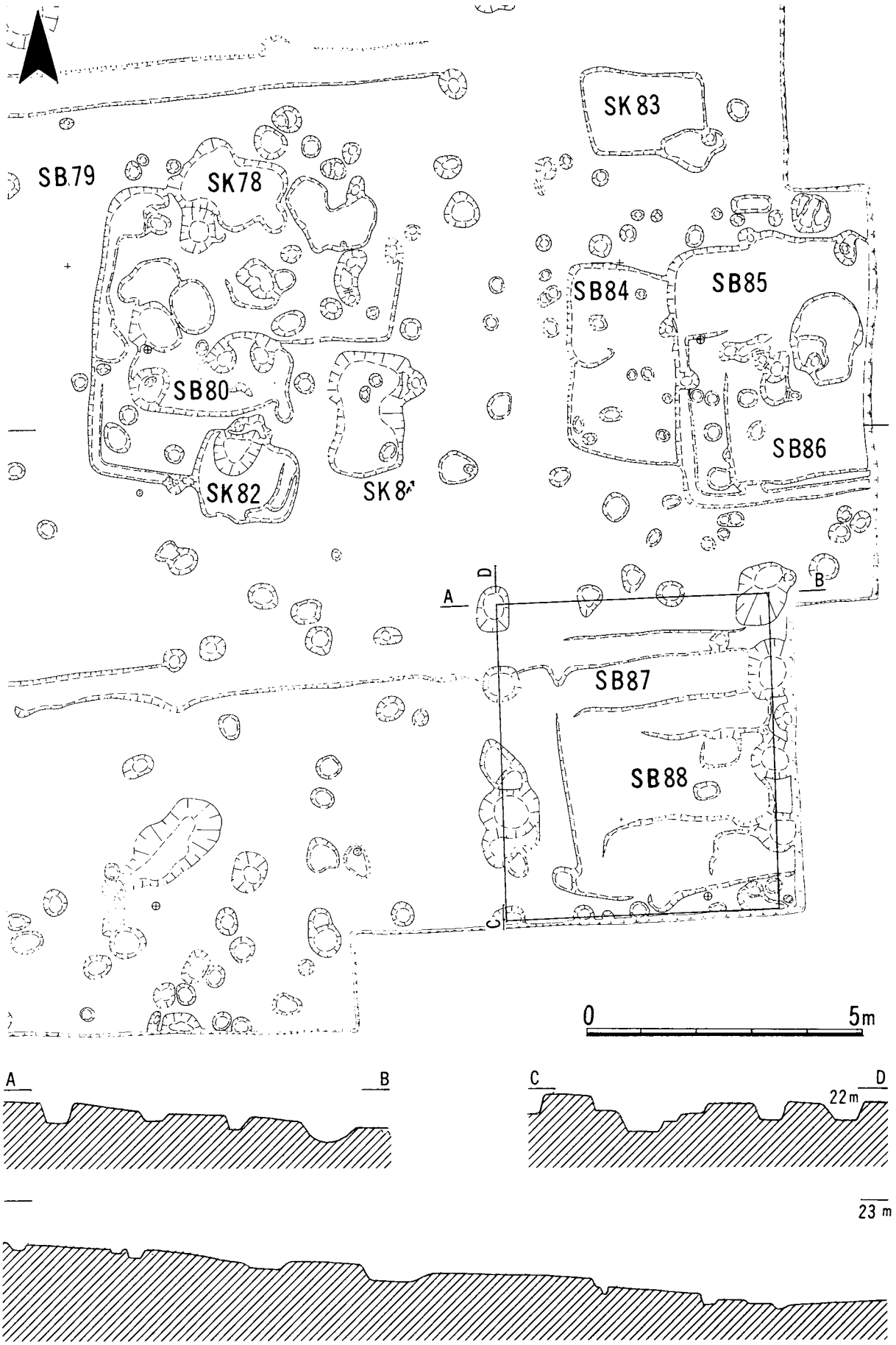
第４図　ＳＢ61 ＳＤ62実測図（１：100）



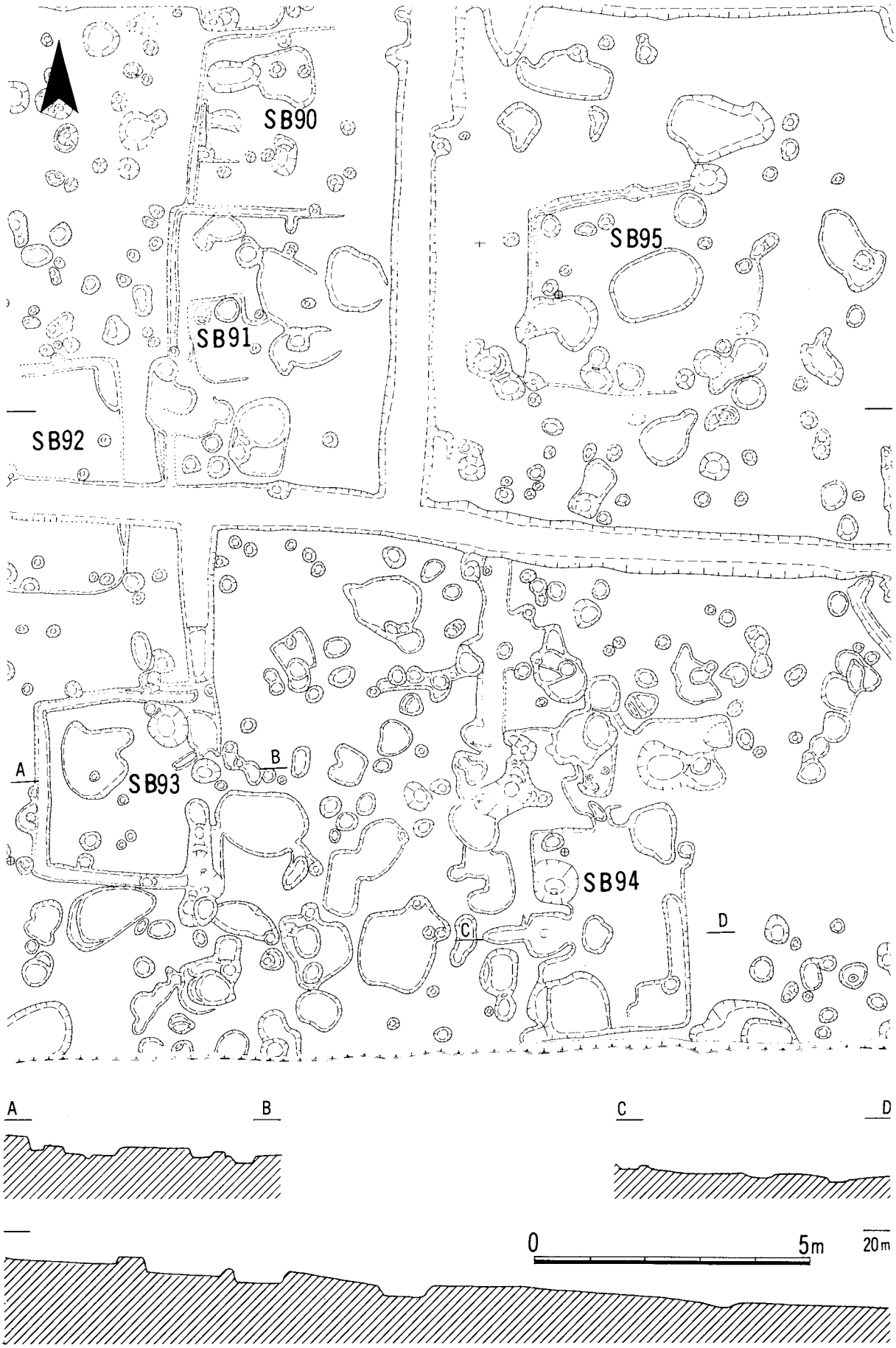
第５図　ＳＢ63～67・69 ＳＤ68実測図（1：100）



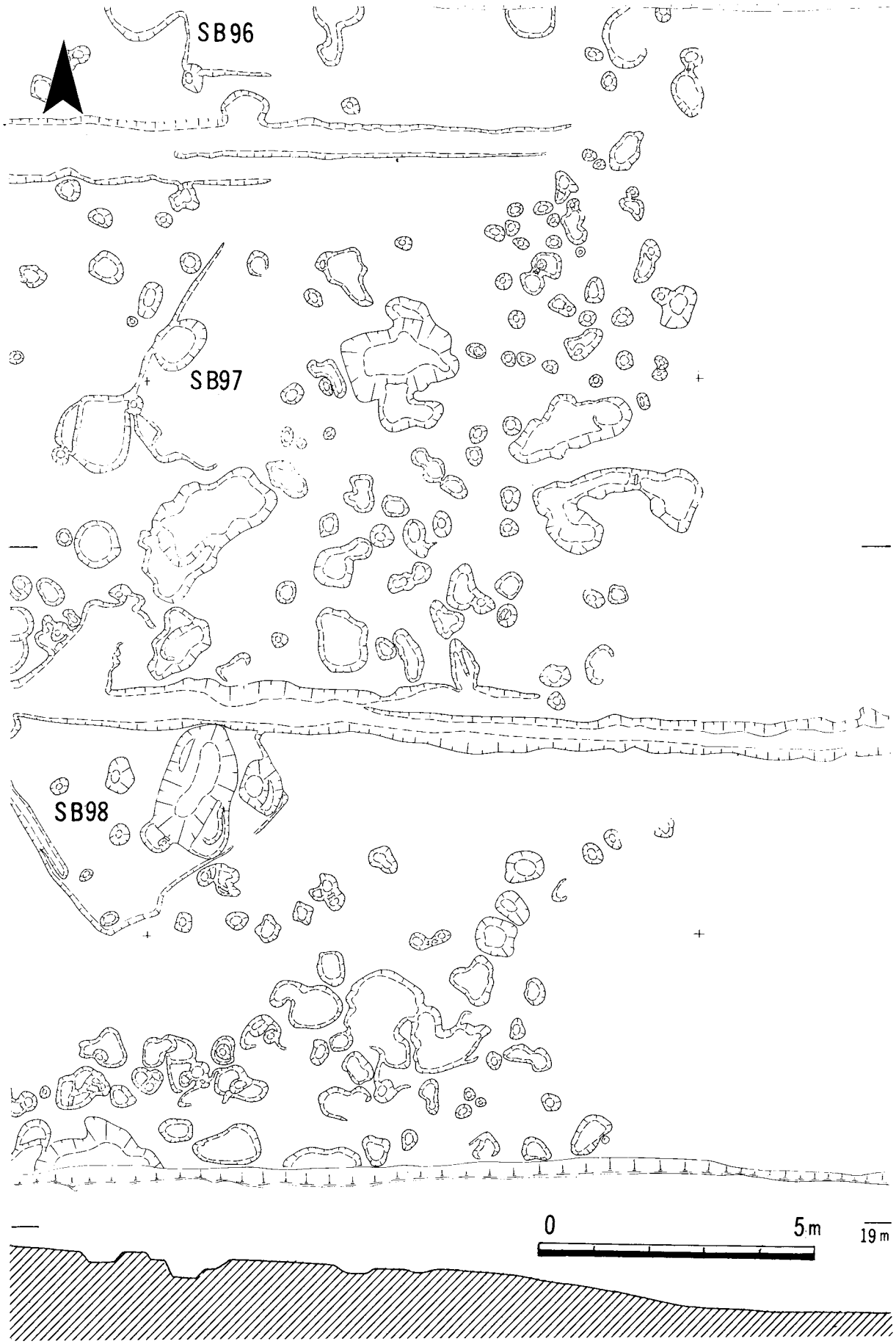
第６図　ＳＢ70～72・74～77 ＳＤ73実測図（1：100）



第７図　ＳＢ79・80・84～88 ＳＫ78・81～83実測図（1：100）



第８図　ＳＢ90～95実測図（1：100）



第９図　ＳＢ96～98実測図（１：100）

、南北 2.2m以上。北壁・西壁で幅15cm前後の周溝を検出したが、東壁では確認されない。東壁中央部で炭化物を含む焼土を確認し、カマドと判断される。

床面から須恵器杯・平瓶の完形品が出土。

ＳＢ79

ＳＢ80・ＳＫ78・82と重複関係にあり、ＳＫ78・82より先行するが、ＳＢ80との前後は明瞭でない。また、東壁は削平されている。東西 2.0m以上、南北5.2mである。三壁とも周溝がめぐる。

明らかにＳＢ79と断定できる遺物には、須恵器杯がある。

ＳＢ80

ＳＢ79・ＳＫ78と重複関係にあり、ＳＫ78より先行するがＳＢ79との関係は明瞭でない。ただ、ＳＢ79の床面精査の段階での検出であり、ＳＢ79より先行するものかも知れない。

ＳＢ79・80の埋土層出土遺物には、土師器・須恵器の杯等がある。

ＳＢ84

ＳＢ85・86と重複関係にあり、両者より先行する。東壁をＳＢ85に切られるため、東西 1.7m以上、南北 3.5m（推定）。

ＳＢ85

ＳＢ84・86と重複関係にあり、ＳＢ84より新しい。東壁は、調査区外にのびるため東西3.5m以上、南北 4.9mの規模である。南壁と西壁の一部に周溝が認められる。

ＳＢ86

ＳＢ85と重複関係にあるが、前後関係は不明である。東西2.5m以上、南北2.5m以上。

ＳＢ88

Ｃ地区の南東隅で検出した竪穴住居である。周溝は南西隅で部分的に認められた。住居の規模は、北側が後世の溝、東側が調査区外へ延びるため不明となっている。住居床面に２ヶ所、約50cm前後の焼土が飛散しているのが認められた。出土遺物は土師器がある。

ＳＢ89

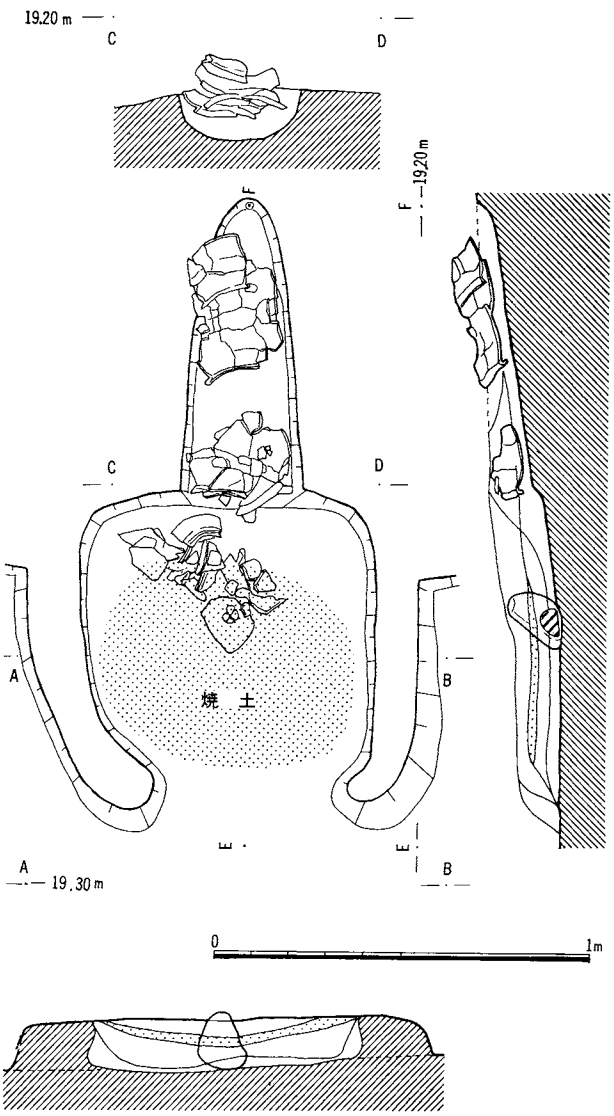
Ｄ地区調査区隅で、南辺部のみを検出したにとどまる。東西3.1mで、南北は不明。

ＳＢ90

プラン東半部は斜面下位により消滅。南側はＳＢ91と重複し、ＳＢ91が新しく、住居の規模は不明確となっている。西辺に周溝の基底部確認。住居掘形は極めて浅く、西壁の遺存度は５cm未満となっている。出土遺物としては、土師器の甕・杯、須恵器の蓋がある。

ＳＢ91

ＳＢ90同様、プラン東半部は斜面下位のため消滅。また南側は後世の溝に切られているために住居規模は不明となっている。住居掘形は浅く、良好な壁といえど10cm程度の遺存である周溝は北、西の２辺で検出。また一辺１m～ 1.4m程の浅い方形ないし不整形の土坑数基と重複しているが、住居の床面精査の際、確認できた遺構ではあるが、前後関係は不明である。出土遺物としては、須恵器の杯・蓋、土師器



第10図　ＳＢ94カマド実測図（1：20）

皿・甕等がある。

ＳＢ92

住居西部分は調査区外へのび、中央部を後世の溝に切られる。東西 2.1m以上、南北 4.2m。北壁・東壁のみに周溝が認められる。

ＳＢ93

住居の東壁を後世の溝に切られるが、ほぼ全容の知れる。東西 3.7m、南北 3.6m。幅約30cmの周溝が四周をめぐる。東壁中央部に、遺存度の比較的よいカマドが検出される。カマドは袖部の基底部をのこし、カマド内部中央には長径25cm・短径15cmの川原石がおかれ、支石の役割をもつものであろう。

住居内から須恵器壺などが出土している。

ＳＢ94

東西 2.8m、南北 3.7mの規模で、東壁の一部に周溝が認められる。西壁中央部に、遺存度のきわめて良好なカマドが検出されている。カマド内の中央には支石が立てられる。住居の深さは、約20cmであるが、カマド奥から長さ80cmの煙道が検出されている。煙道は、幅25cmの浅い溝状をなし、底部を穿孔した土師器の甕を３個体以上並べている。カマド内にはこの他に土師器・須恵器杯が出土。

ＳＢ95

住居の規模は、短辺3.7m、長辺4.3mの長方形プランを呈し、周溝、カマド（東辺中央部）を有している。カマドは、住居埋土（暗褐色粘質土）に若干の焼土粒、炭化物が混入するといった焼土範囲ともいうべきもので厚さ５cm程度である。しかしこれは地形的にみて、斜面下位という遺存状態の不良な東壁に設置されたために、後世の削平等を受けたカマドの残存部とも考えられる。出土遺物としては、土師器甕が床面直上で、また西壁中央部の柱穴上面（住居床面レベル、柱穴底面より浮いた位置）で須恵甕片が出土。

ＳＢ96

大半が調査区外へ拡がり、東西方向の南壁はかろうじて検出され、2.8mである。周溝を伴わない。

ＳＢ97

傾斜地に位置するため、辺南西隅部のみの検出である。

ＳＢ98

中央部を後世の溝に大きく切られている。他の竪穴住居に比べ約45度前後偏る。長辺 4.6m、短辺４mで、南西壁のみに周溝をもつ。

ＳＢ99

取付道路に伴う拡張区で検出した竪穴住居であり、

ＳＢ	規模（m）		深さ	カマド	周溝	備考	ＳＢ	規模（m）		深さ	カマド	周溝	備考
	東西	南北	(cm)					東西	南北	(cm)			
61	5.0	4.0	20		西・南		89	3.1	—	25			
64	4.3	3.8	36	北壁	北・西		90	—	—	13			
65	5.0	4.2	10	—	—		91	—	—	10		北・西	
66	4.0	2.7	15		南		92	—	4.2	7		北・東	
67	4.0	3.2	13		西・南	ＳＢ66の拡張	93	3.7	3.6	15	東壁	東・西・南北	
69	4.7	—	18		西・北		94	2.8	3.7	10	西壁	東	煙道
72	4.8	—	23	北壁	西	貯蔵穴	95	3.7	4.3	18	東壁	北・西	
74	—	—	11		北・西		96	(2.8)	—	9			
75	—	—	16		北・西		97	—	—	25			
76	5.0	4.7	17	東壁	４周	主柱穴	98	4	4.6	12		南西	
77	4.0	—	12	東壁	北・西		99	—	2.1	10			
79	—	5.2	17		北・西		101	—	—	14			
80	—	—	10				102	2.0	2.0	16			
84	—	(3.5)	11				103	2.0	3.0	8			
85	—	4.9	17		南・西		104	—	5.8	15			
86	—	—	14				105	—	—	19			
88	(4.0)	(4.0)	5			炉跡	106	3	2.2	6			

第１表　竪穴住居一覧表　　—不明　（　）推定

西側部分のみの検出である。一辺 2.1mで、他の辺は不明。周溝は認められない。

ＳＢ101

南西隅のみの検出であり、大半が調査区外へのびるため全容は不明。

ＳＢ102・103

ＳＢ103と重複するが、ＳＢ102が拡張されたものと考えられる。ＳＢ102が東西約2.0m、南北 2.2mの非常に小形のものであり、ＳＢ 103は南北方向に1.0m拡張されている。

ＳＢ104

住居の大半が調査区外へ拡がるが、東西 2.0m以上、南北 5.8mの大形の住居である。

ＳＢ105

北西隅のみの検出であり、大半は調査区外へ拡がる。

ＳＢ106

ＳＢ100と重複関係にあるが、新旧関係は不明。東西３m、南北2.2m。周溝は認められない。

２．掘立柱建物

ＳＢ63

２間×２間の南北棟で、建物中央を後世の溝が東西に走るため、柱穴２穴が消滅しているが、総柱建物ではないかと考えられる。柱穴円形掘形で径50cm～80cm、深さ30cmである。桁行3.8m、梁行3.5m、柱間は桁行1.9m、梁行1.7mで棟方向はＮ－15°－Ｅをとる。

ＳＢ70

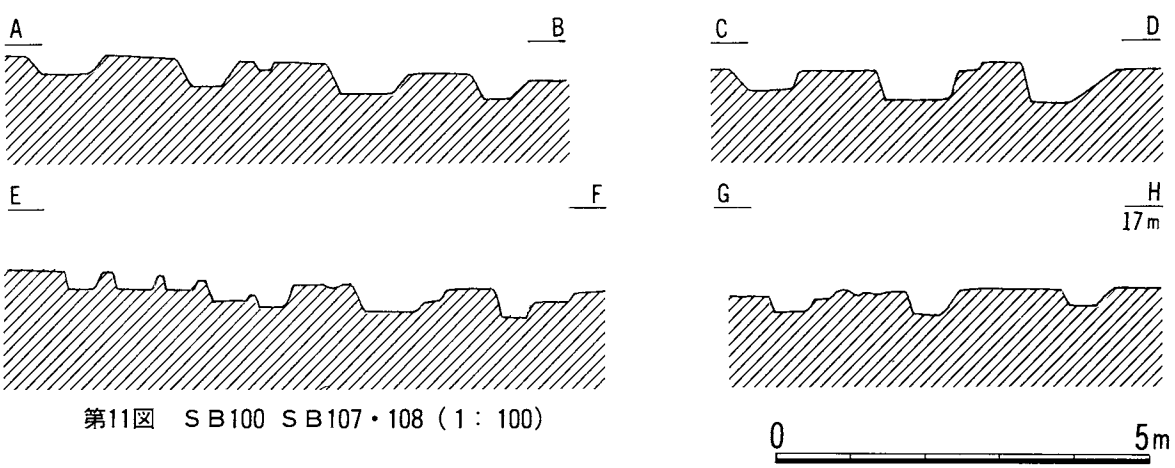
３間×２間の南北棟である。柱間は、桁行が1.4～1.8mとやや不揃いであるのに対し、梁行は1.5m の等間である。柱穴は円形掘形で径50cm前後、深さ30cmである。西側桁行の柱通りが若干悪い。

ＳＢ71

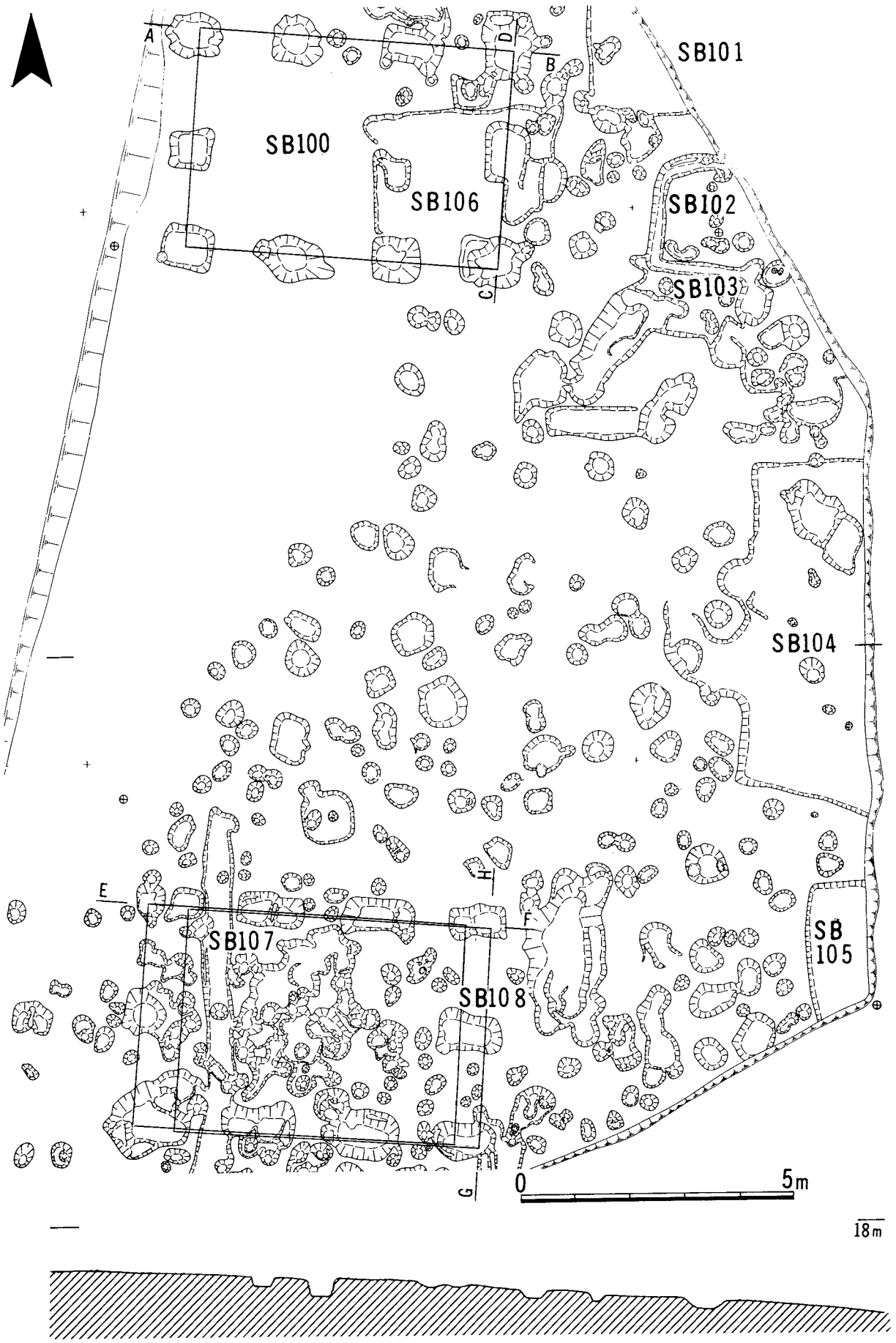
３間×３間の南北棟である。柱間は梁行が 1.7m等間であるのに対して、桁行は 2.2mと拡がりをみせる。柱穴掘形は、円形で径50cm～60cm、深さ20cm～40cmである。これら側柱に対応して、掘形の極め

ＳＢ	規　模(間)	桁　行(m)	梁　行(m)	棟　方　向	柱　間(m)		備　　考
					桁　行	梁　行	
63	2×2	3.8	3.5	N15°E	1.9	1.7	総柱建物(？)
70	3×2	4.8	3.0	N1°E	－	1.5	桁行1.8m＋1.4m＋1.6m
71	3×3	6.6	5.1	N8°E	2.2	1.7	総柱建物
87	4×3	6.0	4.5	N5°W	1.5	1.5	
100	3×2	5.7	3.8	N6°E	1.9	1.9	
106 107	3×2	5.7	3.8	N6°E	1.9	1.9	ＳＢ106・ＳＢ107は建替

第２表　掘立柱建物一覧表



第11図　ＳＢ100 ＳＢ107・108（1：100）



第12図　ＳＢ100～108実測図（1：100）

て小さい柱穴の存在が認められ、床束として機能した総柱建物ではないかと思われる。

ＳＢ87

４間×３間の南北棟であり、柱間は桁行、梁行ともに 1.5ｍ前後である。柱穴掘形は円形で径40cm～70cm、深さ10cm～30cmとなる。この側柱に対応する南側の側柱調査区域外となる。

ＳＢ100

ＳＢ38の北側に約11ｍへだてて建築された３間２間の東西棟である。ＳＢ 107同様方形掘形を呈する柱穴で、桁行、梁行、柱間、棟方向全てにおいて類似し、一定の規格性が認められる建物である。ＳＢ100・107の柱穴内からは一片の出土遺物もない。またＳＢ100は、竪穴住居ＳＢ106と重複関係にあるが、竪穴住居掘形が極めて浅く、床面状態も良好でないなど層位的な新旧関係は不明といわざるを得ない。

ＳＢ107・108

同一住居の建て替えがなされた３間×２間の東西棟である。桁行5.8ｍ、梁行4.0ｍ、柱間は桁行が1.9程）で深さは30cmである。柱穴掘形は方形（辺１ｍ後）で深さは　cmであるが、柱根跡は確認できなかった。この建物付近は大小の柱穴が多数集中して検出され、遺構密度の高い地区となっている。これら柱穴の中には、ＳＢ107・108に属する柱穴の存在も考えられるが、不明確となっている。

Ⅳ．小　　結

天王平遺跡第二次調査区は、水平距離10ｍ毎に高さを平均6.25ｍ減ずる緩斜面に立地している。遺構は、竪穴住居34棟・掘立柱７棟のほか溝・土坑を調査区全域で検出したが、その分布には濃淡が認められる。

竪穴住居の場合、Ａ群；Ｃ地区中央部で10棟、Ｂ群；Ｃ地区東部で６棟、Ｃ群；Ｄ地区西部で10棟、Ｄ群；Ｄ地区東部で７棟の４群に比較的集合した状態で分布する。ただし、Ａ・Ｂ群は、近鉄線で分断されているので本来１群として捉えられるものかもしれない。各群では、２～３棟の重複関係が認められ、時期差のあることを示している。また、竪穴住居の方向は、一辺がほぼ磁北に沿う住居が多いが、異方向を示す住居がＡ群及びＣ群で認められ時期差を示すものかも知れない。Ａ群では、中央部に空間地帯をもつ「コ」字形に住居が分布している。

斜面に立地するため、東辺が削平され全体規模が不明なものが多いが、平面形が長方形をなすものが多く、概して東西に長い住居が多い。長辺は、3.7～5.5ｍ・短辺は2.2～4.7ｍである。住居内面積は、ＳＢ76の23.5㎡を最大とし、ＳＢ106の6.6㎡を最小とするが、20㎡前後のもの（ＳＢ61・65・76）、16㎡前後のもの（ＳＢ64・95・98）、13㎡前後のもの（ＳＢ66・67・93・94）に分類することもできる。

竪穴住居の構造では、ＳＢ76で主柱穴を検出したにすぎず、他では認められなかった。周溝は、半数で認められる。また、カマドを有するものが多いが、多くは焼土痕として認められる程度である。その中でＳＢ94は、カマド・煙道を検出できた例として貴重である。

掘立柱建物は、７棟検出され竪穴住居と重複関係にあるが、その前後関係は不明なものが多く、今後検討を要する。ＳＢ100・107・108は、ともに方形掘形の柱穴をもち、同規模で棟方向も揃えた規格性の強い建物である。

以上のように、第二次調査でも第一次調査同様竪穴住居が主体をなす集落であり、その時期は奈良時代～平安時代初期を中心とするものである。

〈参考文献〉

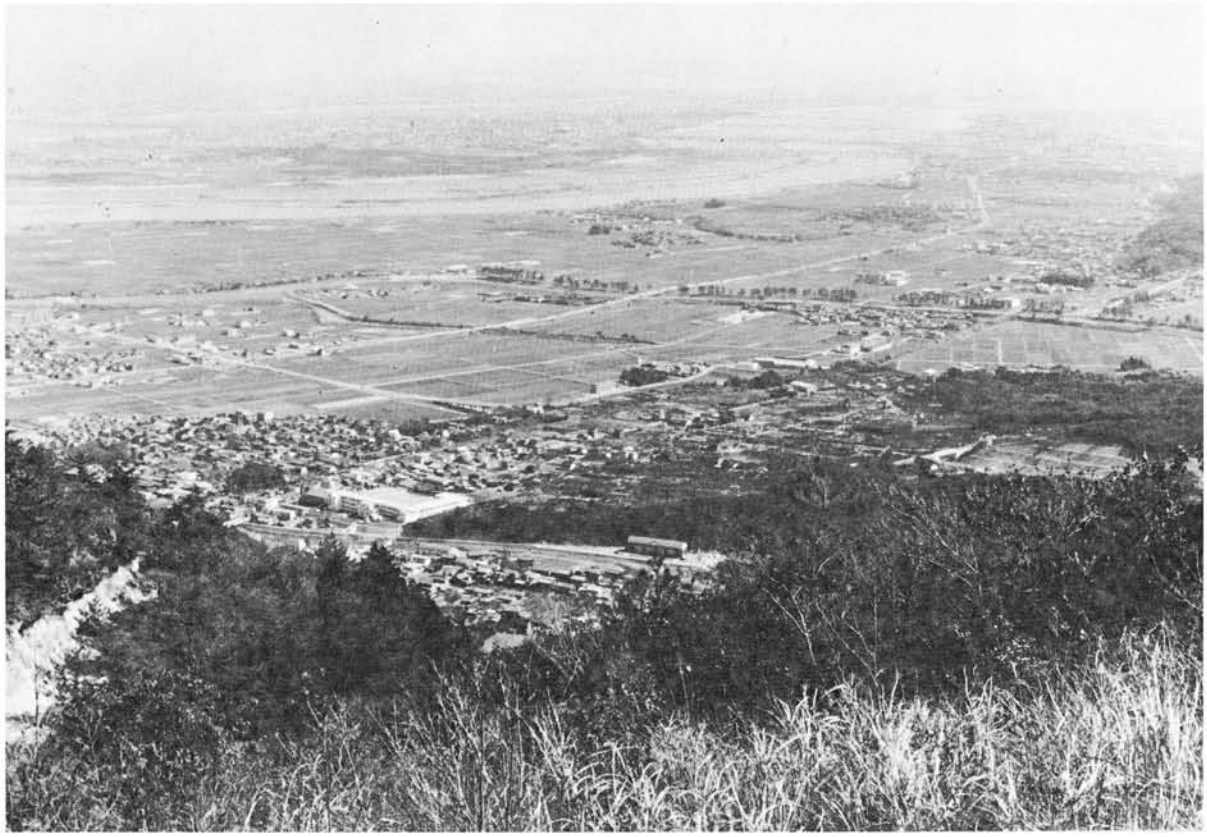
林　博通　「貝野遺跡」四日市市教育委員会　1969

小玉道明　「西山遺跡・新野遺跡」　東員町教育委員会1976

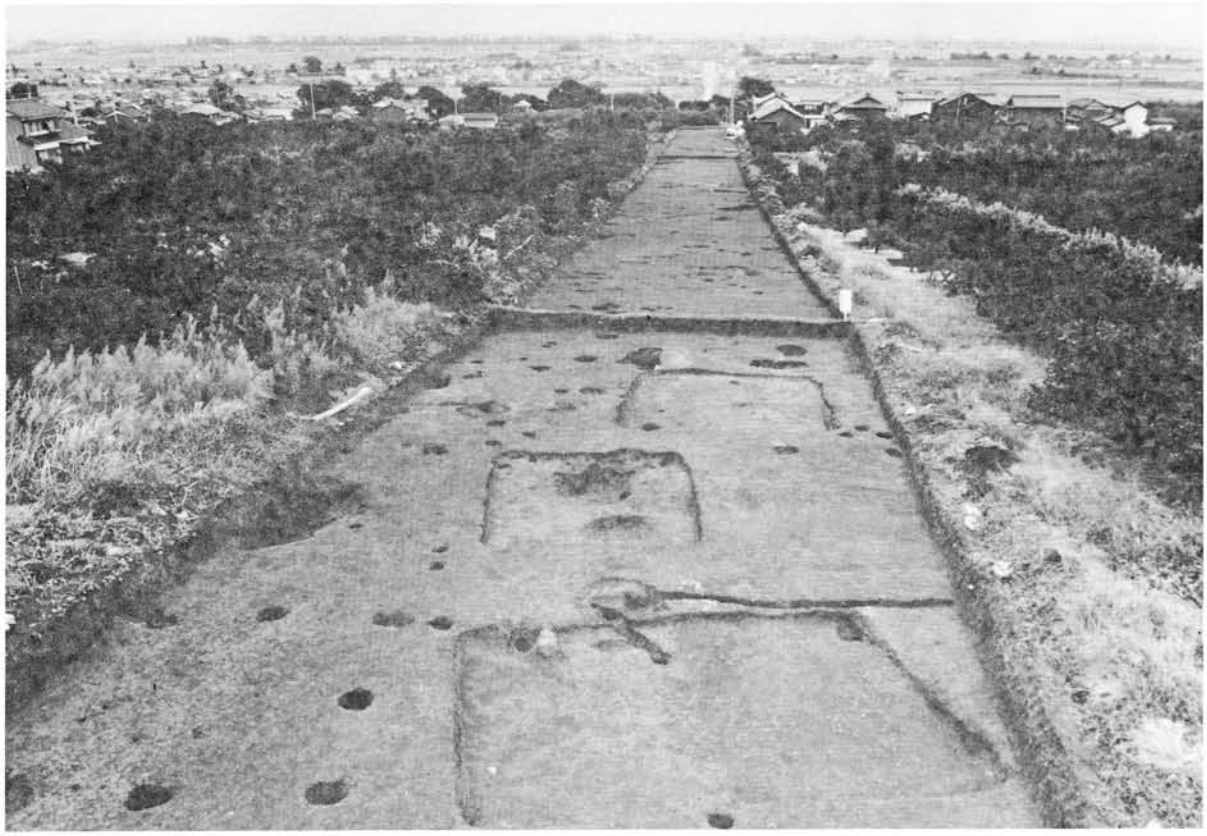
小玉道明　「新野遺跡発掘調査報告　－Ｃ地区－」
東員町教育委員会　1972

伊東春夫ほか　「天王平遺跡発掘調査報告」
多度町教育委員会　1981

図　　版

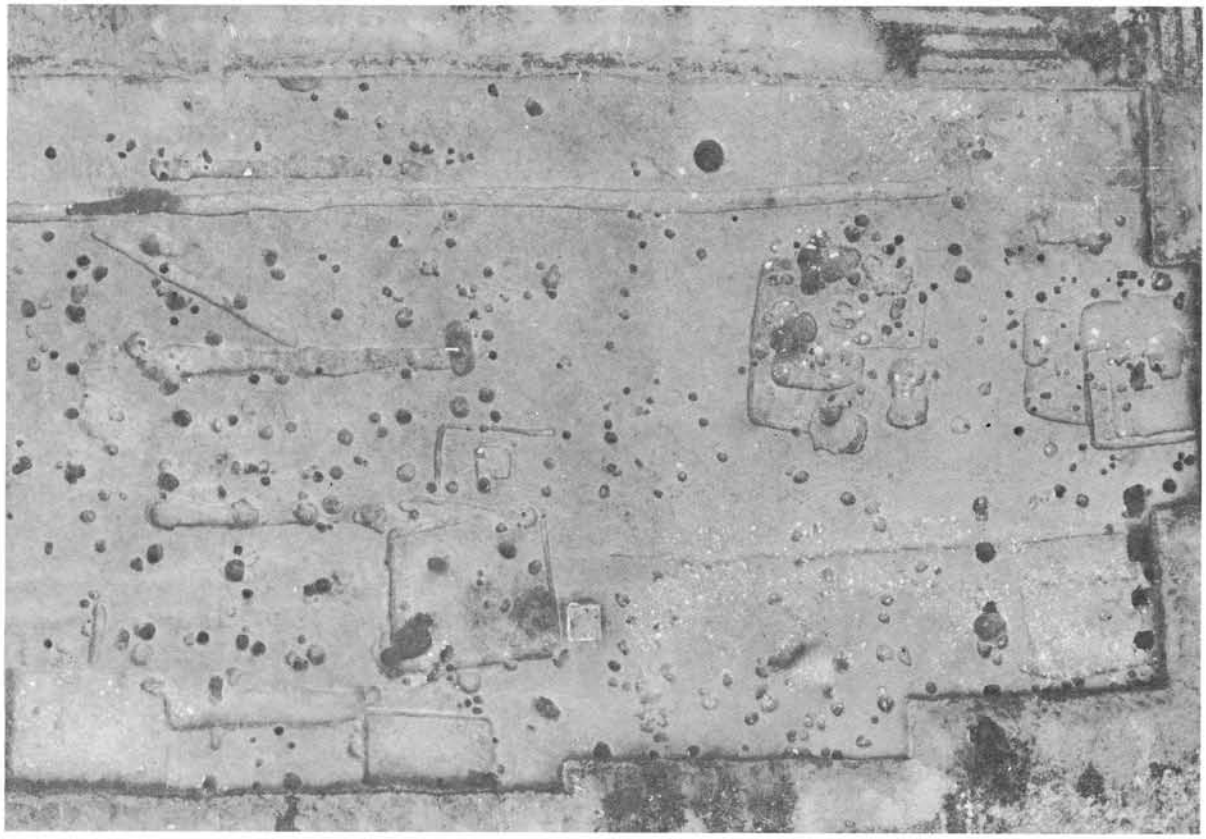


遺跡遠景（北から）

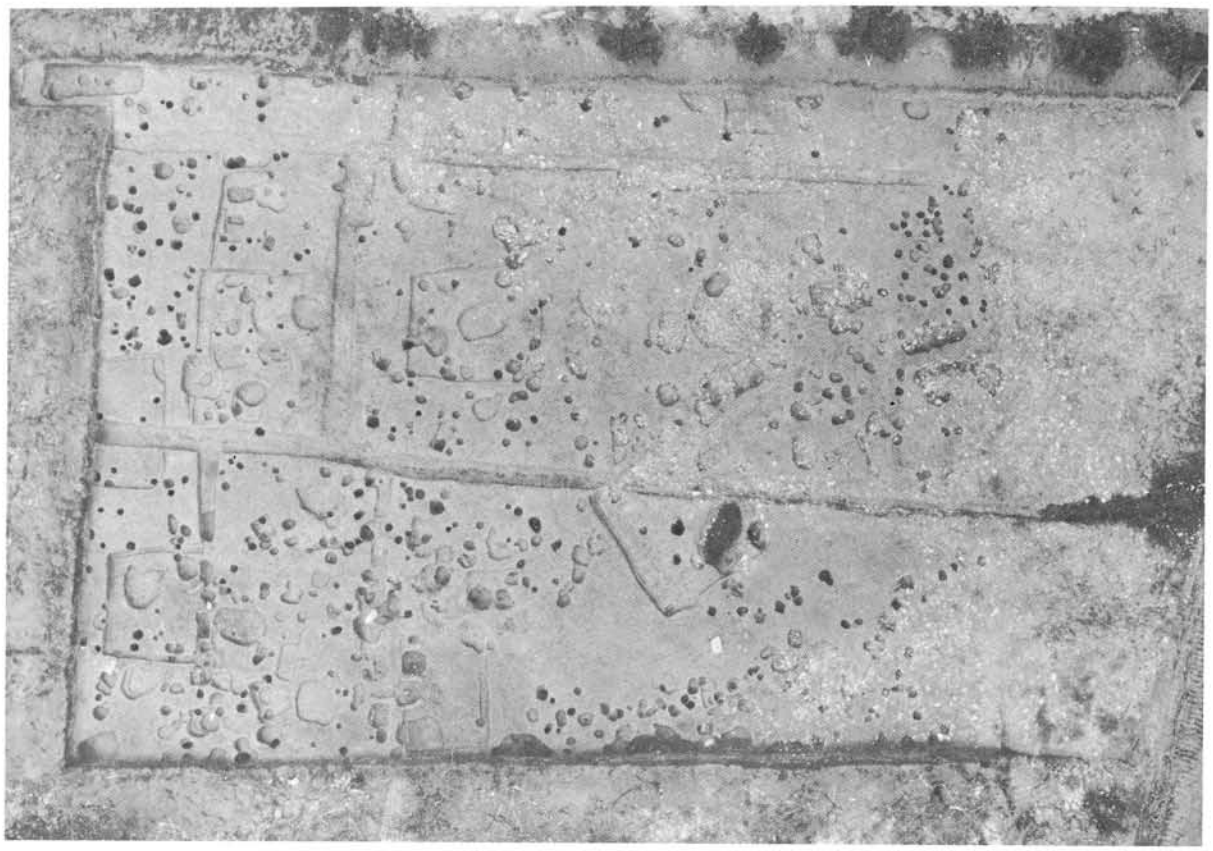


第一次調査近景（西から）

航空写真　C地区西部

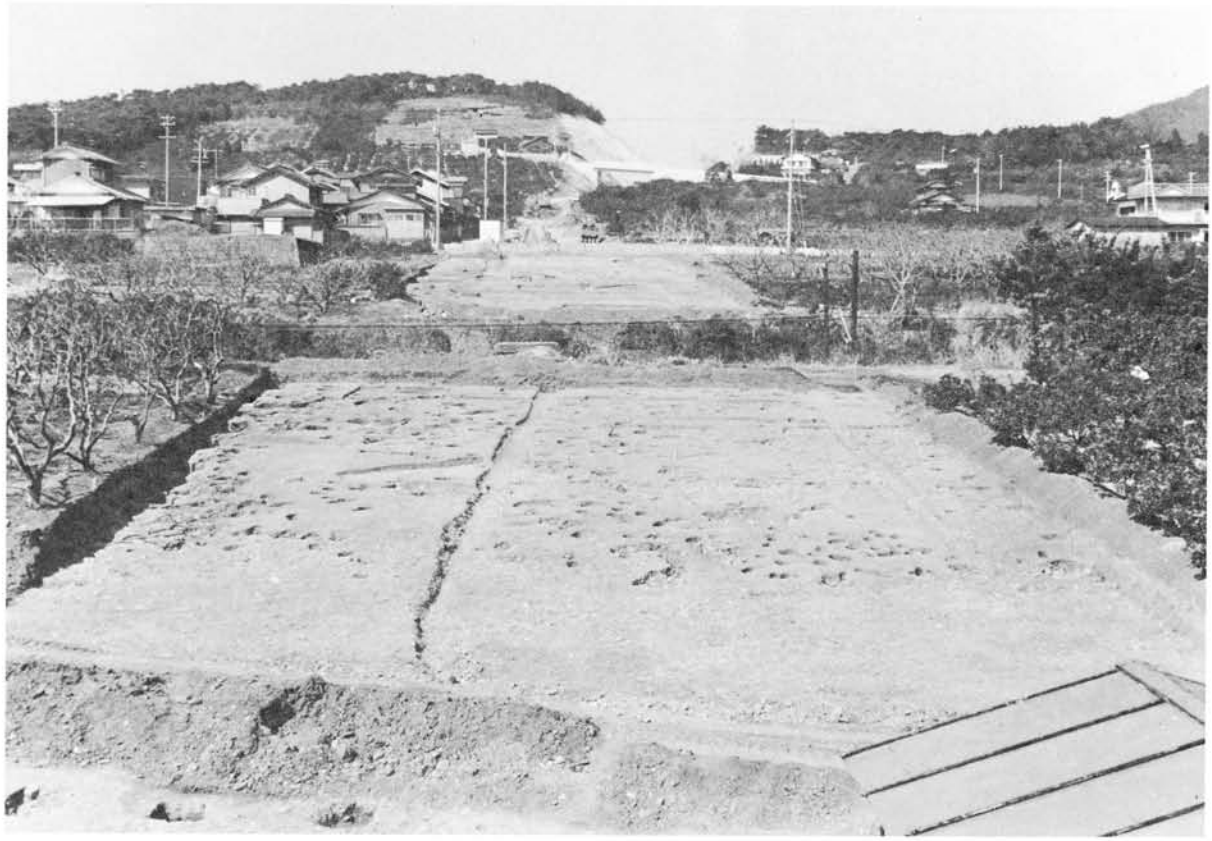


航空写真　C地区東部

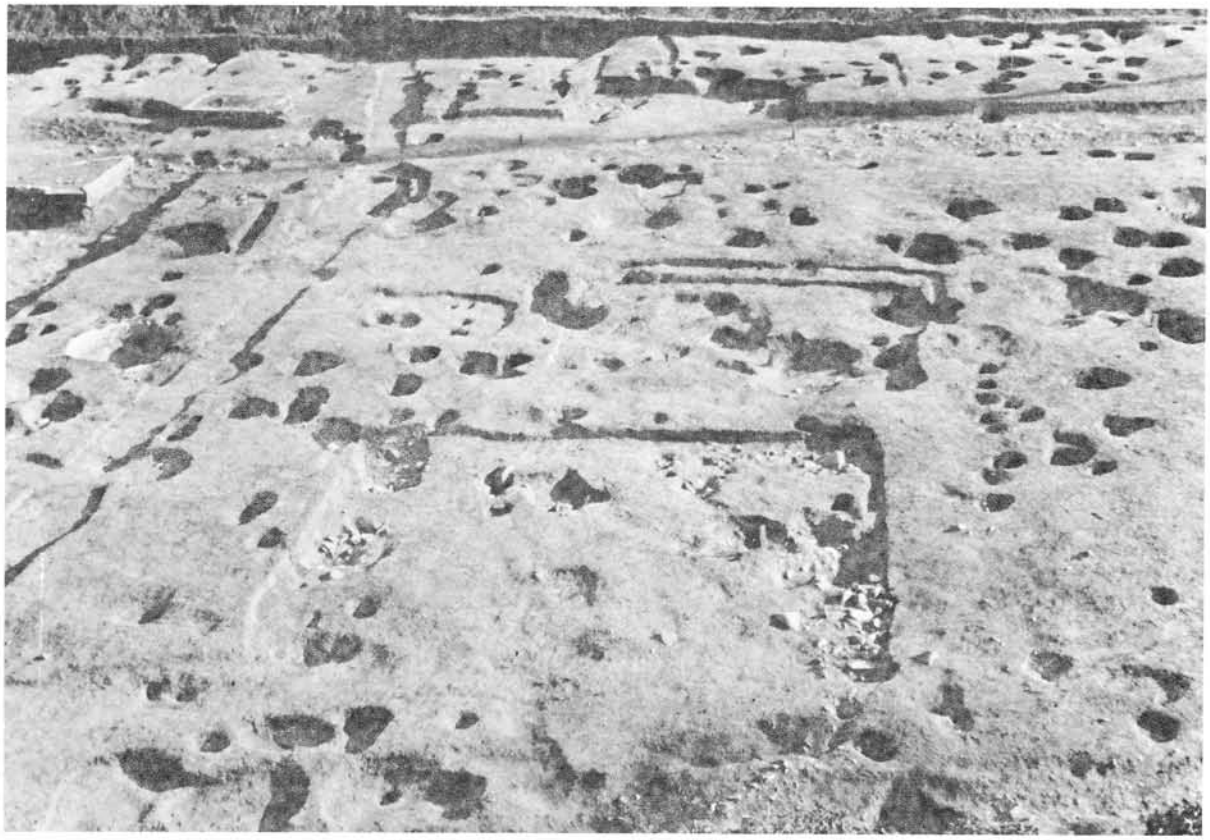


航空写真　D地区西部

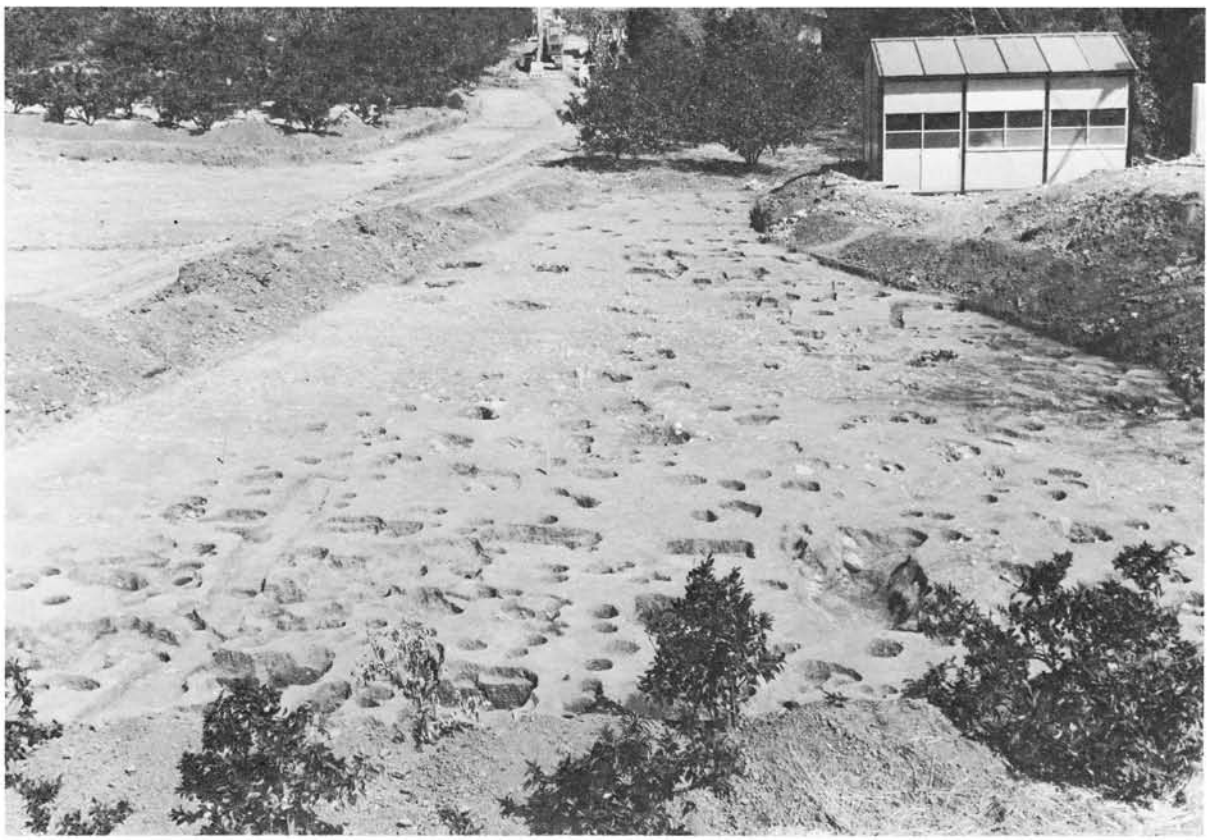
航空写真　D地区東部



第二次調査近景（東から）



C地区中央部（北から）



D地区東部（南から）

D地区拡張区（南から）

SB84・85・86（西から）

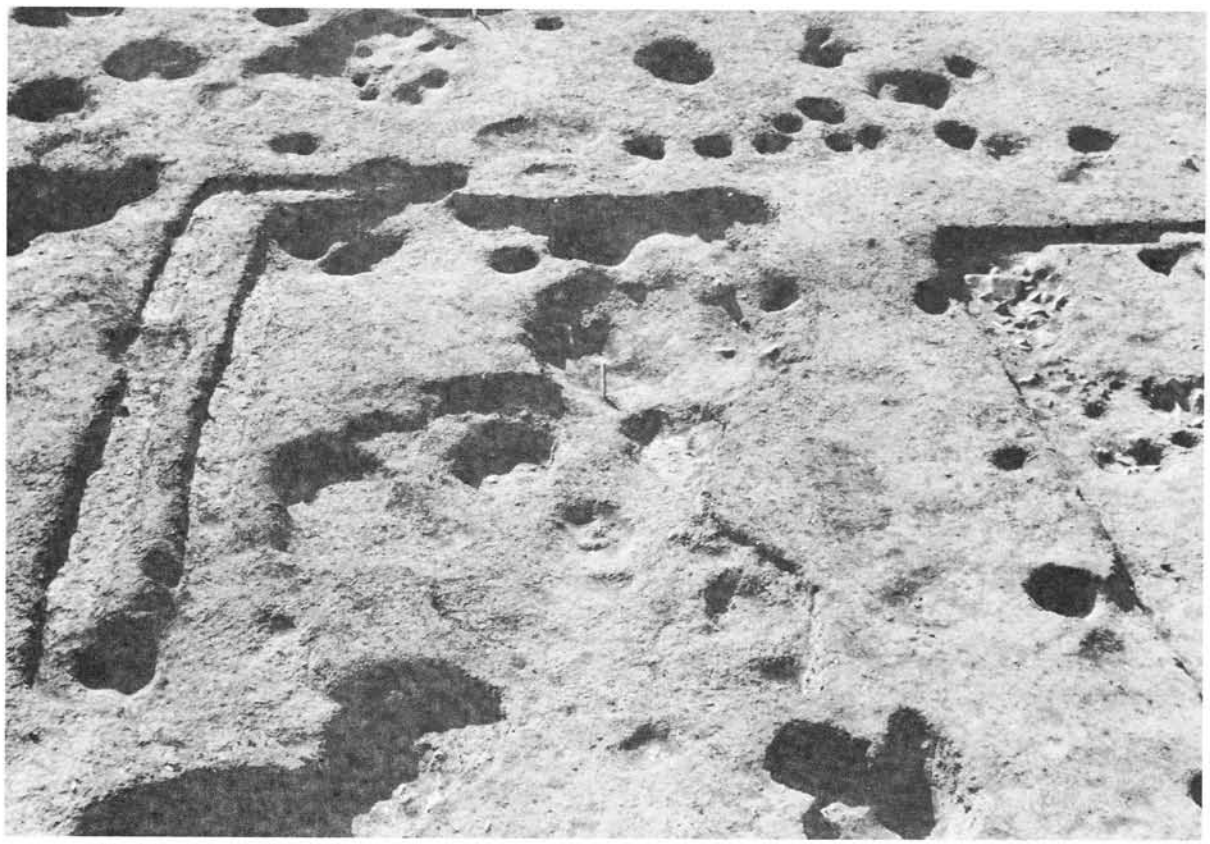
SB79・80（東から）

SB74・75・76（北から）

SB77（北から）

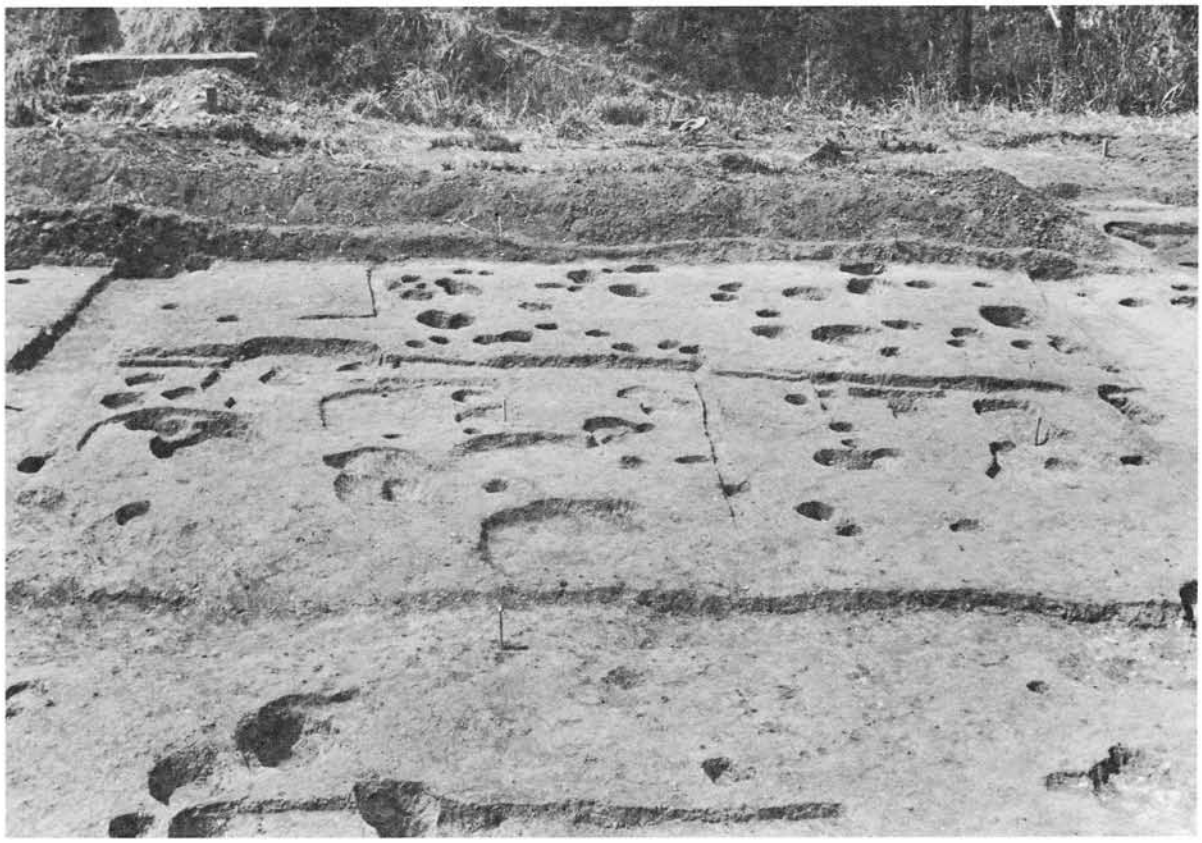
SB69（北から）

SB64（東から）



SB66・67（東から）

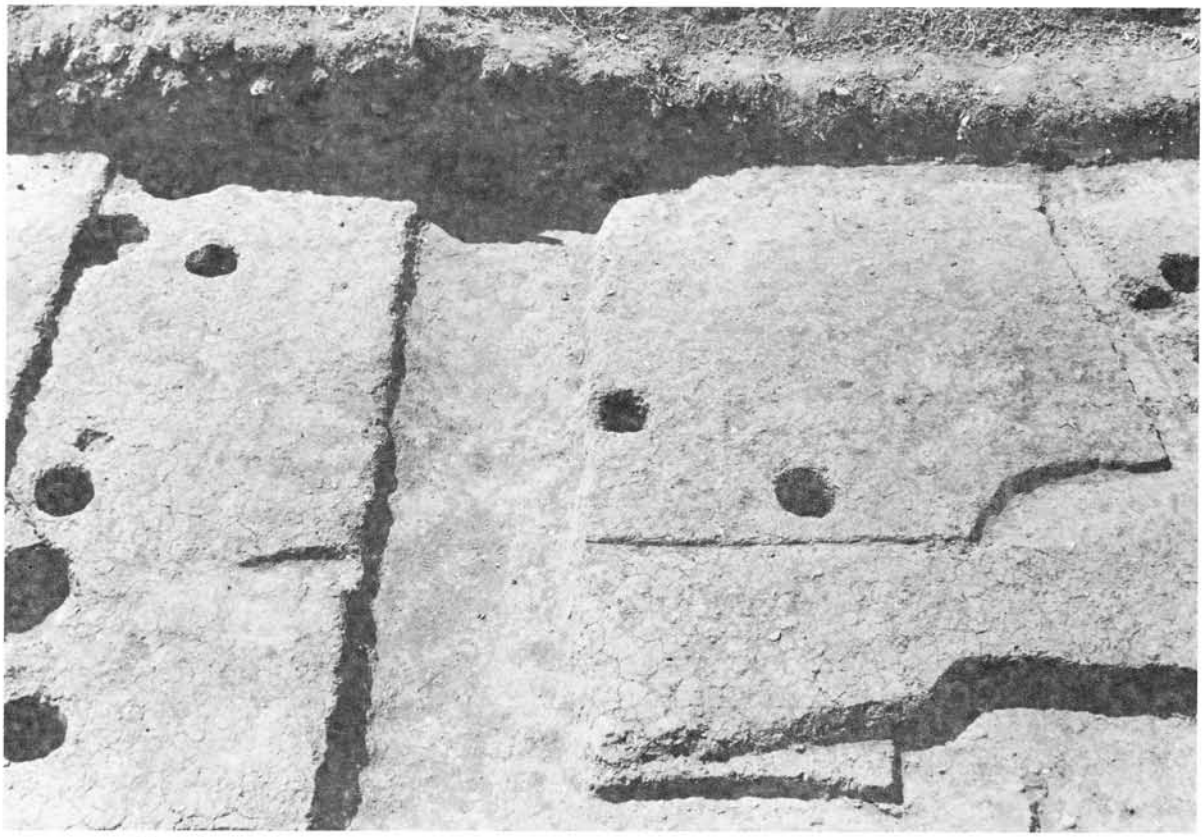
SB65（東から）



D地区西部（東から）

SB98（南西から）

ＳＢ95（西から）



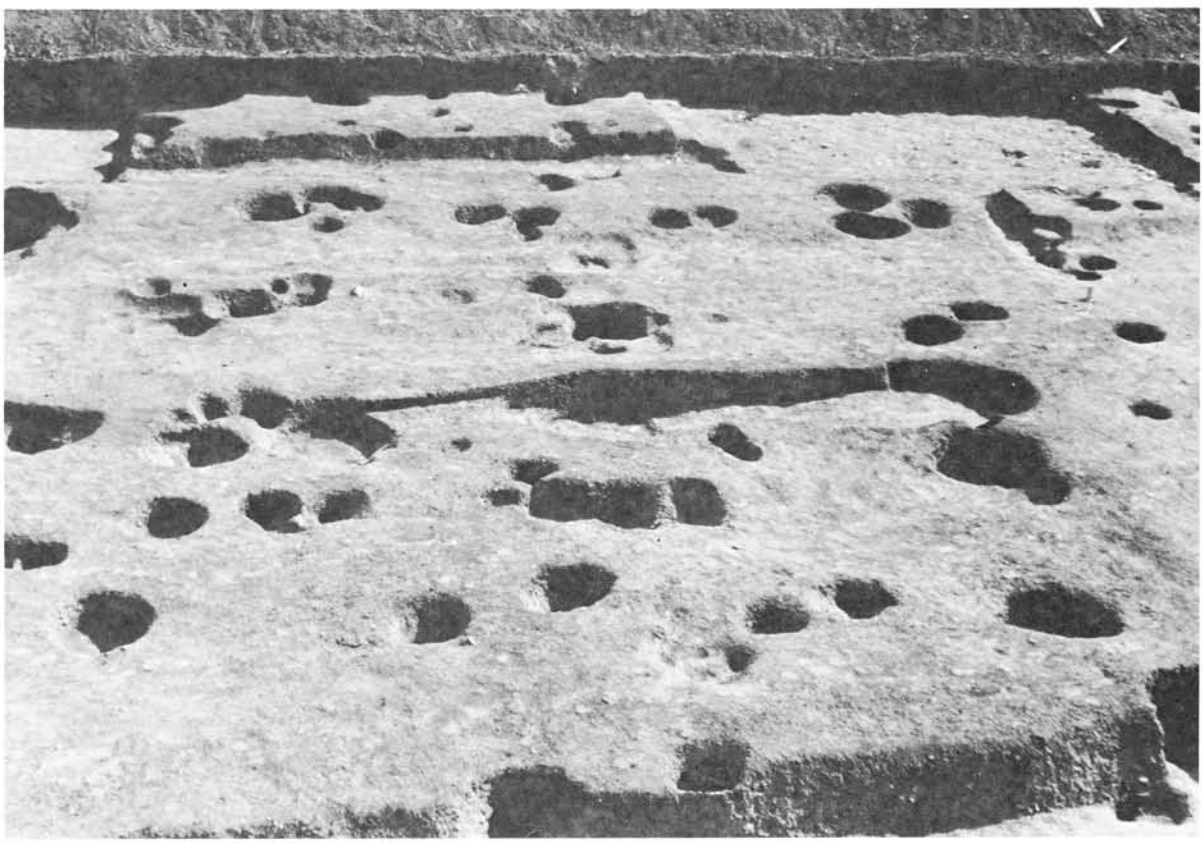
ＳＢ92（東から）

ＳＢ93（西から）

ＳＢ98（東から）

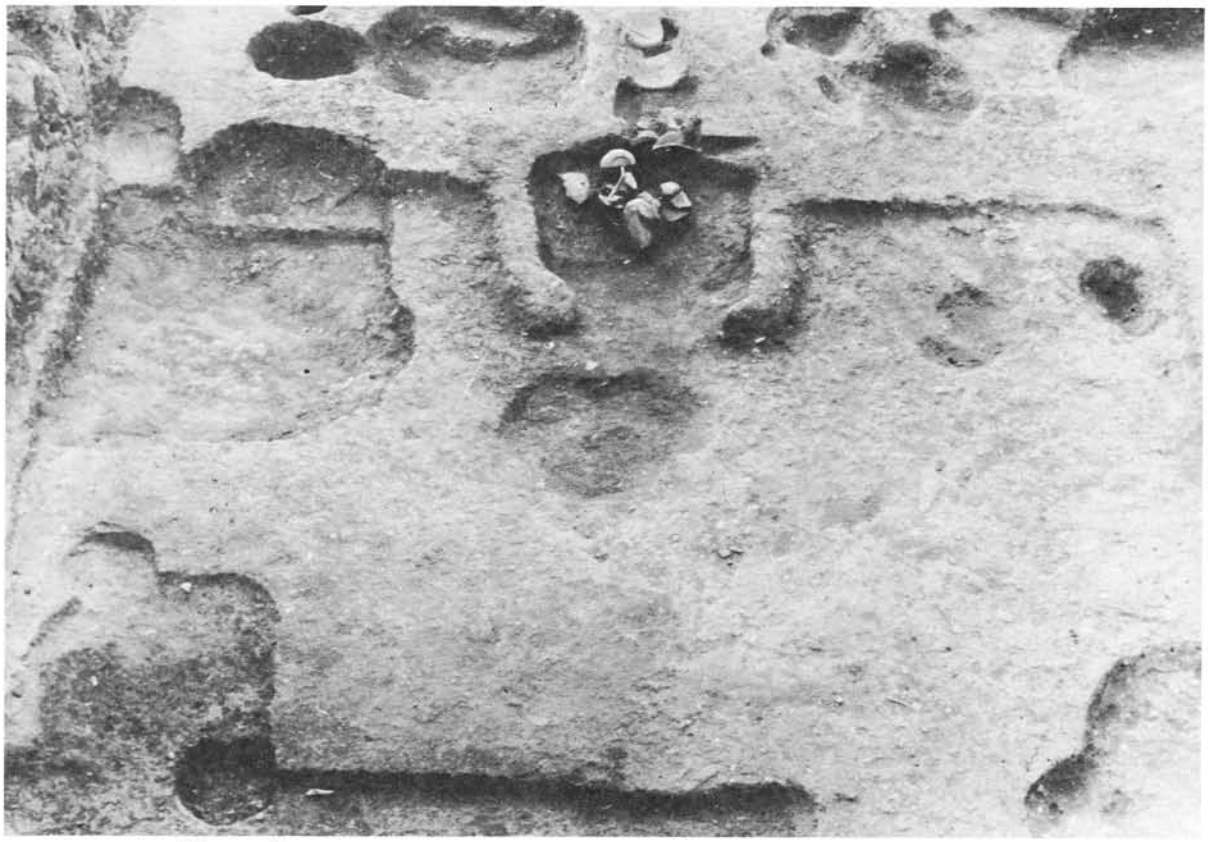
SB102・103（西から）

SB104（西から）



ＳＢ71（北から）

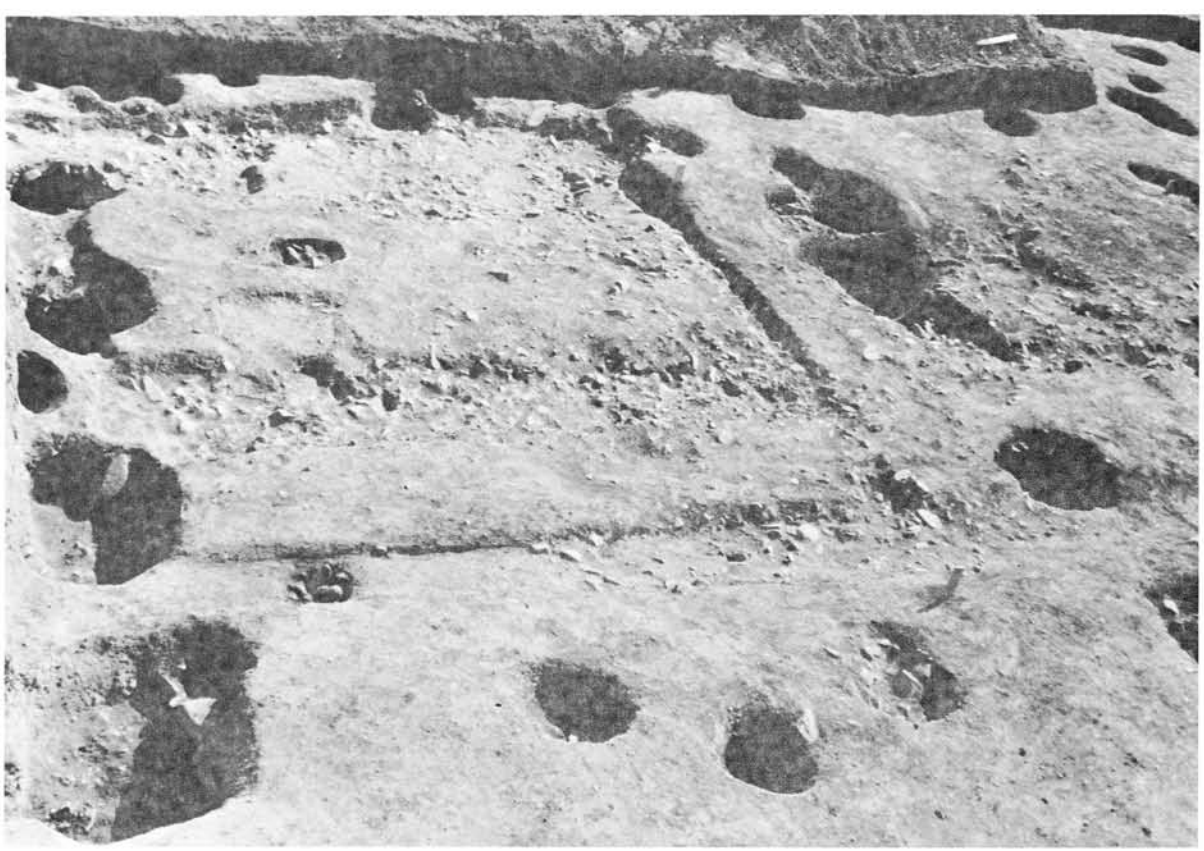
ＳＢ106（北から）



ＳＢ94（東から）

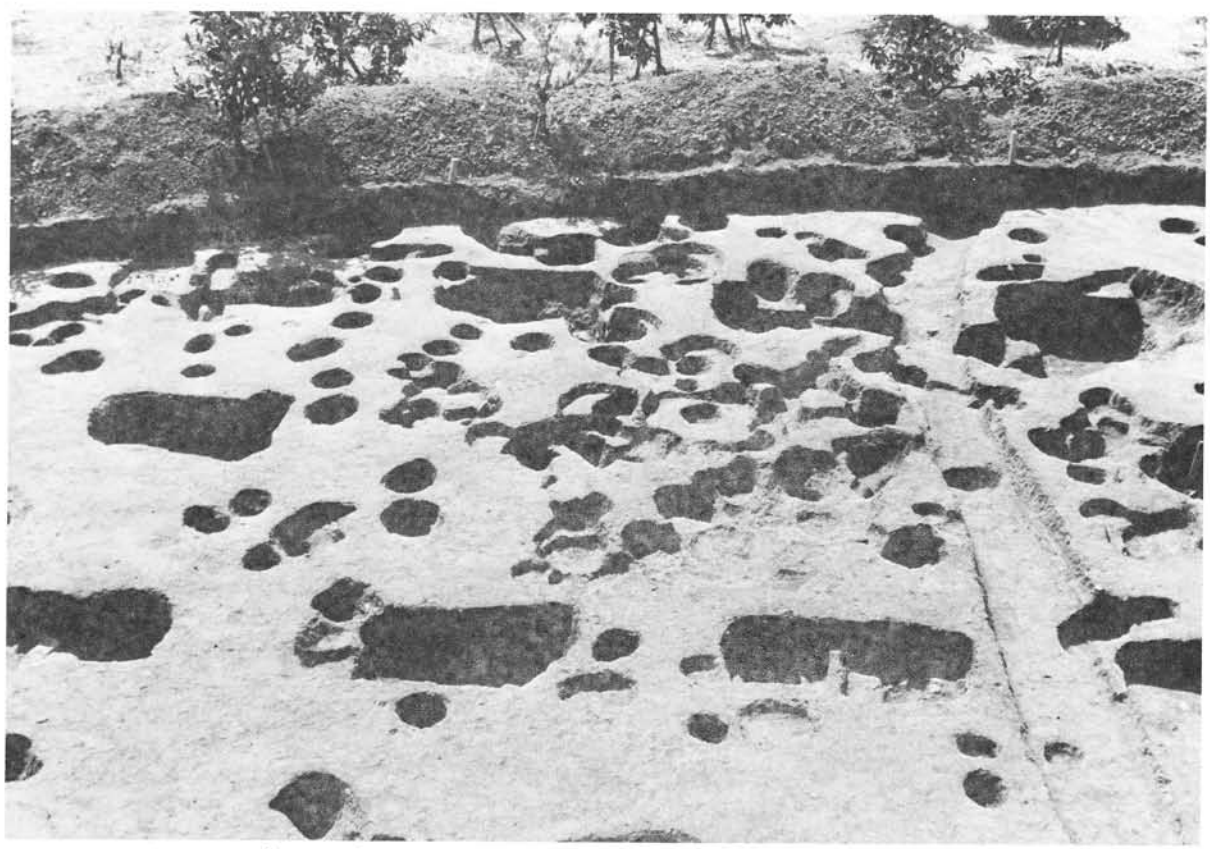
ＳＢ94　カマド近景（東から）

SB70（東から）



SB87（北から）

ＳＢ100（北から）



ＳＢ106・107（北から）

昭和58(1983)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　52-2

天王平遺跡発掘調査報告 II
— 第二次調査 遺構編 —

昭和58年3月31日

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　第一プリント社